

4

2018年度 実践成果報告

東員町立笹尾東幼稚園・東員町立笹尾第二保育園

鈴鹿市立椿幼稚園

津市立巽ヶ丘幼稚園

松阪市立豊地幼稚園

【研究テーマ】

やり抜く力と生活習慣と接続期の課題

【実践の仮説】

子どもたちが自分の好きな遊びを主体的に遊ぶ中で、どのようにやり抜く力を育てていくかを、園内研修で深め、講師の田口鉄久先生にご指導、ご助言をいただき、今後のやり抜く力を育てる方向性を立てました。

竹馬の取り組みでは、運動が苦手な[H]、[M]に、発達に合わせた援助と、頑張っている過程を認めることで、楽しみながら自らやってみようという気持ちに繋がっていることを確認できました。2人は「今日乗れたんだよ。」「えー、すごいね!」と支え合い、励まし合う姿もあり、嬉しい姿です。今後は「やりたくない。」という[E]や[T]に対し、少しずつ頑張りを認めていく援助を通して、どのように気持ちが変わるか、やり抜く力に繋がられるかを分析し、自分なりの目標を持って楽しむ成長を期待しています。

砂遊びでは、水を流して温かい水と新しい水の冷たさの違いへの気づき、パイプの中を通る水がどこへいくのかを想像し、向きを変えたり音を楽しんだりすること、泥の中から砂だけをすくって掘ろうとすることなど、面白くて好きなことだからこそワクワクし、熱中してやり切っていくことの大切さを教えていただきました。友だちとの関わりの中で刺激し合いながら変わっていくその時の思いをしっかりと掴み、一緒に夢中になって遊び込める子どもを育てていきたいです。

さらに、生活の手順を丁寧にすることが、安心した園生活と充実した遊びに繋がると教えていただきました。例えば、爪の中までしっかりと洗うこと、蛇口を洗って次に人に代わること、机の中に椅子をきちんとしまうことなど、今まで積み上げてきてもらった生活習慣を丁寧にやることを、今後も心がけていきます。

また、遊びの中でつけていく力を、小学校へどのように接続するかを、今後の園内研修、小学校との合同研修などを通して、探っていきます。

【子どもの様子】(6月)

[B]、[F]、[O]、[I]は、走ることに自信を持っていて、鬼遊びが大好きでした。わざと鬼役の保育者を呼んで追いかけられるスリル感を楽しんだり、身を翻しながら逃げて「まだ一回も捕まってないよ。」と、誇らしげに言ったり、捕まった友だちを助けることを楽しんだりするので、思い切り走って一緒に汗をかいてきました。[D]、[H]、[T]は、友だちと一緒に氷鬼を始めても、すぐに抜けていました。円陣を組んで声を出したり、追いかけている時に応援したり、捕まった時には悔しがったりして、自分なりに楽しさを見つけられるように、言葉をかけながら遊んできて、今では、「先生、一緒に氷鬼しよう。」と、

誘ってくれるようになってきました。[P]、[M]は、大勢で鬼遊びというのはあまり好きではないようで、よくブランコで遊んでいます。ブランコの楽しさを十分に感じてから、気の合う友だちと好きなリレー遊びをするなどして、友だちとのルールのある遊びに誘っています。

[U]、[N]、[C]、[J]、[R]、[G]は、砂場でよく遊びました。[U]、[N]は穴を掘ったり、とゆを繋げて水を流したりすることを楽しんでます。バケツをひっくり返してとゆをのせて坂にしたり、とゆの繋ぎ目から水が漏れると重ね方を反対にしたりして、考え、工夫し、試行錯誤を繰り返しながら、自分のやりたいことに遊び込んでいく姿がありました。[R]、[G]は、遊び始めるもののすぐに他の遊びに移り、友だちの砂遊びが盛り上がってくると「入れて。」と、入ることがありました。



[A]、[B]、[F]、[I]、[K]、[P]、[Q]、[U]は、竹馬に乗ってみようと挑戦する姿があり、足の指の皮がめくれても、「皮がめくれたよ！」と、嬉しそうにし、乗って遊びました。そんな友だちの姿を見て、少し消極的だった[D]、[H]、[J]、[M]、[N]、[O]、[S]も「先生、持って。」と意欲を持って取り組み始めました。[E]は、絵本を読んだり、制作したりすることが好きで、自分の世界に夢中になって遊ぶ素敵なおところがありました。一方で、できそうにない竹馬には「なんでやらなあかんの?」「めんどくさい。」と、言うてしまう姿がありました。

室内では、[A]、[H]、[S]、[D]、[I]は、マーブリングのきれいさに感動し、たくさん作って模様を楽しみました。[A]は、息を吹きかけて水面の色の動きをよく見て、混ぜ方を加減したり、「青と緑で作ったら、宇宙みたいになった！」と感じたり、よく考えていました。友だちの模様を見合うことで、「ああいう模様を作ってみたいな。」と、真似し合いながら、繰り返し楽しみました。

生活面では、室内環境の変化から多少手順の変わったところがあったので、手順表を確認しながら一つずつ進めていく姿がありました。年少、年中と積み上げてきてもらっているので、すぐに対応しスムーズにこなしていけるようになりました。[O]、[F]はテキパキと進め、すぐに遊びに向かいます。しかし、[R]、[G]、[T]、[J]は集中力が続かず、途中で他ごとに気を取られてしまったり、手順がバラバラだったりしていました。

【実践のねらいと内容】

砂場遊び

- 〈ねらい〉 自分のやりたい遊びを楽しみ、充実感を味わう。
砂、水、泥、道具などとの対話を通して、発見や自分の考えを楽しむ。
友だちの思いを知り、一緒に遊ぶ楽しさを味わう。
- 〈内容〉 自分のやりたいことを遊ぶようにする。
とゆ、塩ビ管、バケツ、筒など、色々な道具を使って試行錯誤する。
自分なりに仮説を立て、実験し、結論を出すプロセスを楽しむ。

竹馬の取り組み

- 〈ねらい〉 難しいことにも諦めずに取り組み、やってみようとする。
「できるかもしれない。」「できた!」という喜びを感じる。
- 〈内容〉 主体的に遊ぶ中で、意欲を持って頑張ろうとする。
自分なりに目標を持って取り組み、達成感を味わう。
友だち同士でコツを伝え合ったり、頑張りを認め合ったりする。
運動会でお家の人に見てもらって、頑張ってきた心地よさを感じる。

プール遊び

- 〈ねらい〉 水と慣れ親しみ、遊ぶことを楽しむ。
水の気持ち良さを感じる。
- 〈内容〉 顔つけ、潜る、泳ぐなど、難しいこともやってみようとする。
貝拾い、友だちと一緒に泳ぐなど、ダイナミックに遊ぶことを楽しむ。
絵本や友だちの姿を見て、自分もやってみたいという意欲に繋げる。

短縄の取り組み

- 〈ねらい〉 竹馬での達成感を基に、できないことにも意欲的に挑戦する。
できるようになることに喜びを感じ、繰り返し遊ぶことを楽しむ。
- 〈内容〉 長縄で、一箇所リズムよく跳ぶことを身につけ、楽しむ。
縄の回し方や跳ぶタイミングなど、段階的に慣れていく。
友だち同士で数え合ったり、認め合ったりする。

ルールのある集団遊び

- 〈ねらい〉 友だちと一緒に体を使って遊ぶことを楽しむ。
ルールの必要性が分かり、ルールを作り、守って遊ぶことを楽しむ。
困ったことが起こった時には、友だちと一緒に解決しようとする。

< 内容 > リレー、鬼遊び、しっぽとりなど、繰り返し熱中して遊びを楽しむ。
困ったことが起こったら、友だちの思いを聞き合うようにする。
協力、作戦、相談を通して、仲間関係を深める。

【活動への環境の構成】

砂場遊び

砂場には、大きいスコップ、小さいスコップ、バケツ、とゆ、塩ビ管などを用意し、自分の遊びに必要な物を選んだり、色々試したりできるように設定しました。

自分で使った道具は、きれいに洗い、責任を持って片付けるようにしました。

竹馬の取り組み

保護者に竹馬を作ってもらい、早く乗ってみたいという意欲や、大切に扱おうとする気持ちに繋がりました。

竹馬頑張りカードを作ってシールを貼っていき、自分の頑張りを視覚で感じられるようにしました。後半には、自分なりの目標を書いて、自分だけのカードを作っていました。

自分の竹馬は、フェンスにリボン結びで結びつけて片付けるようにしました。

足のせが大きすぎて乗りにくさがある竹馬や、竹が割れてしまった時には、その様子を保護者に伝え、改良をお願いしました。

プール遊び

小学校の低学年用プールを借りて遊びました。

準備体操をしっかりすること、水に慣れること、休憩すること、飛び込まないこと、プールサイドは走らないことなど、約束を絵表示で示しながら伝え、安全に遊べるように配慮しました。

『およぐ』『ぐりとぐらのかいすいよく』を部屋に設定し、読み聞かせ、絵本の貸し出しをしました。

短縄の取り組み

いつでも自分で選んで遊べるようにテラスに設定しました。

何回跳んだか、前跳びや後ろ跳びなど、自分で自由に書き込める縄跳びカードを用意しました。

今年度3回、運動遊びの指導員に来園していただき、短縄跳びに必要な運動遊びを教してもらいました。

ルールのある集団遊び

ラインカー、バトン、しっぽとりのしっぽなど、自由に使えるように設定しました。
小学校の校庭を借りて、思い切り体を動かして遊べるようにしました。
保育者も、仲間の一員として遊びに加わりました。

【支援・声掛けのポイント、工夫】

砂場遊び

- ・友だちの遊びに「入れて。」と、入ったが、何もせずに立ち尽くしている[G]
→「どんなことをやってみたいの？」と尋ねると、「船を水に浮かばせたい。」「穴を掘って水を貯めたい。」との思いがあったので、友だちの場所ではなく[G]の場所を作り一緒に遊ぶことで、自分のやりたいことを楽しむ経験を積み上げました。
- ・とゆや筒を繋げて、水の流れを試行錯誤する[J]、[N]
→「水が穴まで流れてこやんね。」と言葉をかけ、水が漏れていることに気づけるようにしました。繋ぎ目の工夫や高さの工夫などには「泥で固めたら穴がふさがるね。」「ナイスアイデアやね!」と伝えることで、試行錯誤を促したり、水が高いところから低いところに流れることなどの科学的な気づきに繋げたりしてきました。

竹馬の取り組み

- ・「なんでやらなあかんの。」「今は、部屋で遊びたいん。」「めんどくさい。」と言う[E]
→今やりたいことを認めながらも、「時計の針が6になったら一度やろうよ。」と見通しを持てるように話して誘いました。戸外へ出てきた時には、来てくれて嬉しい気持ちを伝え、竹馬を支えながら、「そうそう、前に体重かけれとるよ。」「今、前に降りられたの良かったよ。」と、コツを掴めている部分を具体的に言葉で認めるようにしました。また、その頑張りを保護者に伝え、たくさん褒めてもらえるように関わりました。月案討議で[E]の頑張りを話し、園内の色々な先生にも声をかけてもらえるようにしました。
- ・一生懸命練習するが、なかなかコツが掴みきれない[J]
→竹馬を一生懸命練習していて数歩歩けている[J]を見て、[D]が「もうすぐ乗れるね。私もそんな時あったよ。明日もやったら絶対乗れるよ!」と、励ましてくれました。保育者は、友だちからの励ましを「嬉しいことがあったよ。」とクラスで紹介し、お互いの気持ちを高めようと考えました。

プール遊び

- ・仲の良い友だちが泳いで遊んでいる周りに付いている[S]
→友だちと潜ったり泳いだりして遊びたいのではないかと思い、「潜る練習してみよう。」と声をかけました。まずは、水面少し下に手で水を掬うような形にして顔をつけてみ

て鼻に入らなかった＝息を止められているという安心を持てるようにしました。そこから、「口までいけた!」「鼻までいけた!」「目までいけた!」「今、体が浮いたよ。」「貝が拾えたね!」と、できたことを具体的に知らせました。[A]や[R]が、コツを教えてくれたり、励ましてくれたりすることを大切に、クラスでも紹介しました。また、園での頑張りを保護者にも知らせると、家でも頑張っているとのことで、園と家庭とで一緒に[S]の意欲を引き出し、喜びに繋げてきました。

短縄の取り組み

・運動への苦手さがあって消極的な[M]、[T]

→「一緒にやってみよう。」と、一緒に遊びました。一回ずつ跳びでしたが、縄を回せていることや、続けて跳ぼうとする意欲を認めて回数を数えること、引っかからなくなってきたことなどを、具体的に伝えてきました。「明日もやろうね。」「先生も一緒にやろうね。」と約束をして、一緒に遊ぶことを繰り返し楽しみました。そのことで、冬休み中には家でもたくさん遊んだと意欲に繋がりました。

ルールのある集団遊び

・鬼遊びから離れていく[D]

→鬼遊びに誘い、一緒に遊んで楽しいことを伝えていきました。[D]は、気の合う友だちが始めた遊びを一緒にするということが多かったので、[D]が自信を持てるように言葉をかけ、[D]が自分で選んだりレーやダンスなどを一緒に楽しみ、友だちからも認められるように関わってきました。

・運動面にも自信を持っていて、自分を通そうとする[F]

→保育者も仲間の一員となって遊びに参加しました。困ったことがあると、保育者に訴えてくる子が多いので、その都度、みんなで聞き合うようにしました。[B]は、トラブルになるとお互いの思いをきちんと聞いてくれて、「じゃあこうしたら?」という提案までしてくれるので、どんどん後押ししていきました。

【子どもの様子】(1月)



砂場遊びでは、[R]と一緒に遊んでいくと、「山は水で固まる。」「山に水を流すと山が(崩れて)弱くなる。」など、色々な気づきをしていきました。[G]も、山にトンネルを掘って楽しみ、壊してはまた作りと、遊びが続いていくようになりました。また、[U]、[N]が試行錯誤する魅力的な姿に[G]も加わり、「繋ぎ目を泥で固めたらええんちゃう?」などと、新しい

案も出し合いながら楽しむようになりました。

竹馬の取り組みでは、**E**は竹馬頑張りカードのシールが増えていくことを喜び、一生懸命に練習するようになりました。そして、竹馬を大好きになり、竹馬と一体となって乗りこなすほどになりました。“園庭を5周する”、“ジャンプを5回跳ぶ”など、自分だけの頑張りカードを作って、達成していこうとする姿からは、やり抜く力の育ちを感じました。鬼遊びではすぐに抜けていた**E**ですが、2学期後半以降は、しっぽりの友だちの輪の中に自ら「入れて！」と入り、思い切り走って汗をかいて遊びを楽しむようになりました。なかなかコツが掴めなかった**J**ですが、**D**に励ましてもらった翌日、本当に乗れるようになり、園長先生にも「**D**ちゃんが応援してくれたんだよ。」と、嬉しそうに話していました。やり抜く力は、友だち同士で支え合いの中で、仲間と共に育っていくことを感じました。



プール遊びで潜れるようになった**S**は、友だちと一緒に泳いで遊ぶことを十分に楽しみました。自分の思いを達成して遊びを楽しめたことや、家庭にも知らせて、家でも園でも意欲を持って頑張っていることを共有し、たくさん認めてもらったことで、**S**の自己有能感を育むことができました。すっきりと挨拶できなかった朝も、にこやかに挨拶をして登園できるようになりました。好きな曲をかけてダンスを考える時には、「こうやって踊ろう！」と、自分の考えを出したり、全身で表現することを楽しんだり、友だちに「縄跳びしよう！」と、誘うなど、生き生きとした園生活を送るようになりました。

短縄では、**M**、**T**は、冬休みが明けると、「縄跳び跳べるようになったよ！」と、2人ともが連続跳びを見せてくれました。そして2人で「今日も一緒に縄跳びやろう！」と、誘い合って楽しんでいます。2人とも、気の合う友だちが少なく、一人で絵本を読むことが多かったので、気持ちが通じた友だちができたのではないかと嬉しく感じています。



鬼遊び、リレー、サッカー、しっぽりなど、様々な遊びを通して、ルールのある集団遊びを楽しむことができました。繰り返し体を動かして遊ぶことで、体の動きも機敏になってきてい

ます。[D]は、秋頃リレーで活躍したり、[M]と一緒にダンスを楽しんで気持ちが通じた経験をしたりしたことで、自分に自信を持てるようになってきました。鬼遊びは途中で抜けていましたが、2学期以降のしっぽとりでは、汗をかいて時間いっぱい最後まで楽しむようになりました。友だちからも「[D]はめっちゃうまいで、先に狙おう。」などと、認められるようになりました。発表会の劇の取り組みでは、さるかに合戦の母ガニ役に立候補して、次々とお話を考えて、劇をリードしてくれています。友だちの始めた遊びではなく、自分のやりたいことに、自信を持って遊び込めるようになりました。[F]は、強くはないものの、自信はあるため、自分の考え通りにチームを組もうとしたり、友だちを押してしまっても自分を正当化しようとしていたりすることがありました。しかし、周りの友だちも正しい目で見える力がついてきており、仲間に入りながら保育者が後押ししてあげることで、しっかりと問題を解決していこうとするようになりつつあります。[F]も、仲の良い友だちから言われることで気づき、一緒に考えて遊びを楽しくしていこうとする姿になりました。また、繰り返し遊ぶことで、個人戦よりもチーム戦で遊ぶ方が楽しくなり、相談し、作戦を立てて、協力して遊ぶ姿が見られるようになってきました。味方がピンチになると「○○ちゃん、後ろから危ない！」と声をかけたり、助けに行ったり、応援したりして、仲間意識の高まりも感じています。

【生活習慣の向上に向けた取組とその成果】

県内一斉の取り組みとして、生活習慣アンケートの取り組みを年3回行いました。6月と11月には、県の「就学前の子ども向け生活習慣チェックシート」を活用しました。7月から8月の夏休み期間中は、園独自の生活表を用いて、アンケート調査を行いました。

5歳児の子どもたちは、自分たちで色塗りをすることを通して、自分なりに「6時半までに起きよう。」と、意識して取り組んでいました。保護者からは、「アンケートがあると、自分で意識するのでとても良かったです。」「前回よりも早く起きようになりました。」との声もいただきました。

アンケートから見えてきた子どもの生活について、個別懇談会では保護者との共通理解を図り、生活習慣を見直す良い機会になりました。就寝時刻が遅くなりがちですが、しっかりと睡眠をとっている子は、朝からすっきりと登園し、「今日はしっぽとりして遊ぼう。」というように、自分の一日の生活にとっても意欲的です。クラスでも話すことで、意識も高まるので、今後も話していきたいです。

竹馬に消極的であった[E]や、プール遊びで潜る練習をした[S]は、園での姿を伝え、保護者にたくさん認めてもらうことで、自己肯定感・自己有能感が育まれ、さらにやり抜く力の育ちにも繋がりました。生活習慣をしっかりと整えてもらっていて、生活習慣への意識が高い保護者は、園での子どもの姿や友だち関係への意識も高く、子ども自身も意欲的に園生活を楽しもうという気持ちや、頑張ろうとする気持ちが高いことを感じました。

発表会の劇を作り上げる取り組みの中で、**G**、**J**、**K**、**R**は自分たちの出番以外は、しゃべったり、ふざけたり、友だちを見ていなかったり、みんなが準備をしても一人だけ遊んでいたります。普段からあくびがとても多く、集中力や友だちの頑張りを感じられる心の育ちなどに、生活習慣が大きく関わっているのではないかと、感じました。

【小学校との連携方法】

小学校の校庭で遊ぶ

園児たちが通う小学校は、園と隣接しており、園庭と校庭で繋がっています。園庭が狭いこともあり、日頃から自由に校庭を使わせてもらっています。5歳児は、氷鬼、バナナ鬼、しっぽ取りなどの鬼遊びや、サッカーなど、広く使わせてもらうことで、思い切り楽しむことができます。0、1、2歳児の園児たちも、校庭に散歩に出かけることも多く、小学校は小さい頃から身近に感じている園児たちです。また、20分休みには小学生たちも校庭で遊ぶので、園児や保育者とも言葉を交わしたり、顔見知りになったりすることができます。

小学校職員との合同研修会

当園では、毎年夏休みに一回、小学校の先生と合同研修会を行っています。今年度は、7月31日に、幼児期の終わりまでに育てて欲しい10の姿について、園の具体的な実践を通して、小学校の先生と意見交流をしました。

一人ひとりが自分の好きな遊びを楽しむことを大切にしている幼児期から、みんなが同じ授業を受けるといふ小学校への接続について、お互いの意見を聞き合いました。「やりたくない。」という子どもに対してどのように関わっているのか、45分の授業の間、椅子に座ってられる子になって欲しいという小学校側の思いがありました。園ではそれぞれの発達段階に合わせて、遊びを楽しむ中で、友だち関係を築き、5歳児の運動会の取り組みやそれ以降の活動では、だんだんクラスの仲間と力を合わせていくようになります。「やりたくない。」という気持ちがある子に対しても、保育者からだけでなく友だち同士で助け合い、頑張り合える仲間づくりを進めていることを伝えました。夢中になって遊び込むことで集中力を育てると共に、信頼関係の中で、聞こうとする態度や給食の時の姿勢の保持など、意識していきたいと伝えました。

小学校の先生からは、子どもが主体となる学級づくりと授業づくりの工夫が必要になってくるとお聞きしました。

お互いの大切にしていることを交流できたことで、なめらかな接続に向かって、今後の保育を考えるいい機会になりました。

東員町教育研究会の会による保育授業交流と研修会

東員町の研修委員会の取り組みの柱に、16年一貫教育プランというものがあります。胎児から中学校3年生までの育ちを、エリクソンの発達段階を元にした佐々木正美先生の教

えに沿って位置付けられており、その具体的実践の一つに保幼小中の連携というものがあります。理論的に育ちを見つめていくことと、実際の教育の現場を知ろうということが大切にされており、今年度は前期に一回授業保育を見合い、10月24日には授業・保育を見合ったあとで合同研修会を持ちました。感じたことや、意見を交流することで、お互いの大切にしていることや、今後の課題を話し合うことができました。

あすなる CLM 研修会

支援児ではないが、支援があるとよりよく生活していける子を対象とし、スモールステップでその子自身の力を育むと共に、その手立てを通してクラスの力を底上げする研修会に、小中の代表の先生にも参加していただきました。どんな困り感があるか、要因を探り手立てを考え、実践し、評価・振り返りをし、また次の引き算の手立てを考えて取り組むということを通して、幼児期に丁寧な関わりをしていることや、小学校・中学校へと進学している子どもたちのことを知ってもらい、途切れのない支援ができる機会になっています。

小学校のプールを借りる

5歳児は、小学校の低学年用プールを借りて、プール遊びを楽しんできました。70センチほどの深さがあり、潜ったり、泳いだりして、ダイナミックに遊ぶことができ、子どもたちも小学校のプールが大好きです。また、小学生と同じ時間に入ることもあり、先生や児童と顔を合わせて挨拶したり、大きくなるとああやって泳ぐんだという期待感に繋がったりしています。

小学校の夏休みの作品展・音楽会に招待してもらう

作品展に行かせてもらうと、色々と工夫して作られている作品たちを、ワクワク、キラキラした目で見ている子どもたちでした。来年は、自分も作るんだという気持ちを持ったようでした。

小学校の運動会に5歳児が参加・授業体験

運動会前には、ペアの子と顔合わせをして、名前を知ったり遊んだりして、仲良くなることができました。運動会が延期で平日になったため、後日、5年生との交流会となりましたが、相手のお兄さん・お姉さんをしっかりと覚えていて、とても楽しみにしていました。

授業体験は、3月に行う予定ですが、実際に授業を体験することで、1年生への不安な部分をやわらげ、期待感を持てるようにしたいと思います。

「三重県保幼小の円滑な接続のための手引き」を保育に盛り込む

・手洗い、うがいの必要性を知り、丁寧に言い、確認をする。また、ハンカチ、ポケットティッシュをポケットに入れて持ち、必要な時に使う。

- ・給食の中に、どんな赤、黄、緑の3色群が入っているかを知る。苦手な物でも食べようと
し、味わう。食事の目安の時間を知らせ、意識して食べようとする。
 - ・夏野菜や、畑でさつまいもを育て、生長を楽しみにしたり、自分で育てた野菜の美味しさを
味わったりする。
 - ・遊具、竹馬、短縄など、色々な遊びを通して挑戦する意欲を育てたり、できる喜びを感じ
たり、色々な体の使い方や、安全に遊ぶ方法を知ったりする。
 - ・生活アンケートを通して、規則正しい生活を送ろうと意識する。
 - ・朝の会を開き、今日の予定を知り、自分がどう過ごすか見通しを持って生活する。
 - ・保育者や友だち、地域の方と挨拶を交わしたり、丁寧な言葉遣いを知ったりする。
 - ・集団遊びや発表会などの取り組みを通して、友だちと一緒に頑張ったり、友だちの思いと
自分の思いの違いを知り、折り合いをつけながら遊びを深めたりしようとする。
 - ・様々な遊びや散歩に出かけて自然に触れることで、様々なことを、感じ、考える。また、
それらを、言葉、絵、身体表現、制作など、様々な方法で表現することを楽しむ。
 - ・友だちと鬼遊び、リレー、しっぽとりなどを繰り返し楽しみ、ルールの大切さ、きまりを
守ることの大切さを知る。
- このように日々の保育の中で、手引きの内容を大切に組み込んでいます。

【学識経験者より】

東員町立笹尾東幼稚園

1. 就学前教育機関としての一体的な取り組み

東員町立笹尾東幼稚園は笹尾第二保育園との一体化園です。三重県の幼児教育推進事業には両園の先生が同じ立場で参加しました。本年度（平成30年度）は幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時に改訂された年です。幼児教育を行う施設として「育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が共有され、3歳以上の幼児教育に係る「ねらい、内容等」が共通化しました。今回、幼稚園と保育所が協働して取り組んだことは意義あることです。

三重県が示した「まなびをつなぎ ゆめをはぐくむ」保幼小接続のための手引は幼稚園も保育所も認定こども園も同じように取組んで小学校教育につながってほしいという願いが込められています。そのことを笹尾東幼稚園・笹尾第二保育園は実現させました。

また、私が関わった4回の研修会のうち2回は東員町内の他園の先生方へも呼びかけを行いました。事例紹介・ディスカッションなどを通して保幼小接続を意識した教育・保育への取り組みの重要性は他園へも伝わりました。

2. テーマ設定と園内研修の工夫

笹尾東幼稚園・笹尾第二保育園は園の教育・保育課題に東員町の教育基本方針の一部（やり抜く力、基本的な生活習慣）と県の接続期の課題の一部（生活習慣が土台、自分でやりとげた満足感）を盛り込んで「やり抜く力と生活習慣と接続期の課題」のテーマで取り組みました。

園内研修のうち2回は研究保育と協議を行いました。担当の先生は事例の報告と当日の指導計画案を準備しました。園内の先生方が交代で（時間を区切って）対象とするクラスの保育を参観し、保育終了後熱心な協議を行いました。ここでは幼稚園籍、保育所籍の先生が共に園児の姿から、保育者の援助のあり方について自分の保育と照らし合わせて積極的に発言し、テーマに沿った協議が行われました。私が印象的であったのは、研究協議を通じてどの先生も子どもの姿や担当の先生が行う援助から学ぼうとする姿勢でした。

3. 子どもの姿、保育を細かく見ることの重要性

片付けに自然に参加する幼児の姿、話をじっと聞く幼児の姿などを通して「生活習慣の確立」が安定した生活につながり、学習や社会性の育成の基本になることを話し合いました。また、プール遊びに意欲をもった幼児の事例や竹馬に挑戦する幼児の姿を通して、充実した人生に必要なことは「やり抜く力」であることについても話し合いました。そこには一人ひとりの幼児の成長を喜ぶ先生方の姿がありました。

日々の保育は総合的に行われていますが、幼児が育とうとする姿や遊びの中にある学びの芽を細かく見ることを通して、就学前教育・保育が「後の小学校教育とつながる力を培っている」ことを確かめることができました。

【研究テーマ】

思考力の芽生えと生活習慣と接続期の課題

【実践の仮説】

近年、教師や保護者が提示した課題や遊びに対しては積極的に参加できたり、取り組めたりする子どもが増え、大人にとっての「よい子」が増えてきたことを感じます。

しかし、その子どもの多くが、指示がもらえない、課題が見つからない状況におかれると、動けないうえに、誰かに依存してしまうという姿がみられます。これは、子どもに自ら考えることをさせてなかった大人の責任だと考えます。

そこで、当園では教師がこたえを出す、教えるのではなく、子ども自らが行動し、「気付いたり」「考えたり」「予想したり」「工夫したり」する姿を大切にしたいと考えました。幼稚園生活のなかで、遊びのなかで子どもが疑問に思ったことや発見したことは、子どもの声として機会を逃すことなくまごど受け止めます。子どもの「なぜ」とことん付き合い、子どもの探究しようとする姿、時間を保障し、その過程に着目し、遊びとして没頭できるように支えます。同時に、教師として子どもの興味や欲求に応じた先を見越した環境を子どもの活動から予想される計画を立て、子どもの発達にとって意味のあるものになるよう、展開に応じて再構成していきます。

時には、子どもに目的意識、責任（まかせる）をもたせる環境を与えることも大切です。ある程度の責任判断をさせることで、主体的に自ら行動する力が育つと考えます。これらの取り組みは、個の充実感や育ちにとどまらず、人や物、自然といったまわりとの多様なかわりを楽しむようになり、友達の考えに触れたり、話し合ったりするなかで更に充実した時間を生み、探究心、意欲さらには集中力へともつながっていくと考えています。

子どもが主体的に楽しく遊ぼうとする意欲がもてること。遊びや生活のなかで心を動かしたことに對して、疑問に思ったり、不思議を感じたりしたことを試行錯誤しながら、探究しようとする事。それが幼稚園における思考力の芽生えだと考えます。

【子どもの様子】

前期

年長になり、身近な草花に興味をもった年長児Aが、園庭（つばき園）でタンポポを見つけた。タンポポの花粉がスタンプのようになることに気づいた年長児Aは、タンポポを使ってスタンプ遊びを始めた。

その様子を見ていた年長児のB、Cも同じように、自分たちの周りにはる様々な草花を使って、スタンプ遊びを始めた。年長児B、Cもタンポポでスタンプをしたり、タンポポの葉でスタンプをしたりして遊んだ。その後、もっとスタンプを見つけたいと思い、園庭（つばき園）にある草花だけでなく、小学校にある草花や木の実などを取りに行った。



そして、小学校から戻ると「よし、試してみよう!」と、集めてきた草花や木の実でスタンプ遊びを始めた。そのなかで、年長児B、Cが、フジの花でスタンプをした時「紫になった!・・・あれっ?青になったよ!」と、スタンプの色が、花と同じになるものばかりではなく、花とは違う色になるものがあることにも気づいた。そして、その後も、色に変化する不思議を感じながら、スタンプ遊びを楽しんだ。

また、途中、年中児d、eは、年長児B、Cが遊んでいる様子を見て、「どうしてスタンプになるの?色がついとんでかな?ドングリもできるかな?」と、ドングリで試してみたが、できないことに気づいた。その様子を見ていた年長児Bが、「これ(タンポポ)ならできるよ」とタンポポを渡した。年中児d、eは、そのタンポポでスタンプができると、満足して、また、ドングリ集めに戻っていった。

この時期は、個々が、自分のしたい遊びを十分に満足するまで楽しんでいる。友だちとのつながりは、まだまだ少ない。また、教師や友だちとの信頼関係を、遊びを通して築いていく時期でもある。教師が、子どもの思いに寄り添いながら一緒に遊び、子どもの思いを子どもと同じ目線で感じ、気づくことで、子どもとの信頼関係が築かれ、子どもは、安心して過ごせるようになっていく。安心して過ごせるようになると、周りの環境や人にも目が向くようになり、その環境や人にかかわっていくなかで、今まで気づかなかったことにも気づくようになる。そして、『色々な不思議』や『おもしろい事象』にも出会い、好奇心をもって探究するようになってくる。このことが、思考力の芽生えの第一歩につながるのではないかと考える。またここで、友だちとの関係が築かれていれば、自分一人で調べるだけではなく、友だちと一緒に考えたり、他児の考えを知ったりすることにもつながり、様々な考えに気づいていくようになると思う。

今はまだ、自分の気づきや発見を、関係のできている子に伝え、『同じようにやってみよう』『本当だ』と、同じように試してみたり、共感したりするだけであるが、今後は、身近な環境のなかで出会う『不思議』や『なぜだろう?』という個々の気づきや発見を、クラス全体で共有し、互いに考え、互いに考えを出し合えるようになってほしいと思う。また、相手の考えを聞くことで、自分の考えだけではなく、他の考え方を知ったり、様々な考えがあるということに気づいたりして、一つの目的に向かって、互いに考えを出し合いながら、試行錯誤していけるようになってほしいと思う。

【実践のねらいと内容】

4月～7月

<ねらい>

- ・身近な環境にかかわるなかで、草花の不思議に気づいたり、発見したりすることを楽しむ。
- ・身近な自然や環境に興味や関心をもって遊ぶ。

- ・自分の思ったことを友だちに伝えながら、一緒に遊ぶ楽しさを味わう。
- ・動植物の観察や世話を通して、優しさやいたわりの気持ちをもつ。

<内 容>

- ・身近な草花に興味、関心をもち、草花を使ってスタンプ遊びをする。
- ・園外保育では、春探しをしたり、自分なりに目的をもって参加したりする。
- ・自分のイメージしたことを、友だちに伝えたり、友だちの思いを聞いたりしながら、一緒にごっこ遊びをする。
- ・水や砂、泥の感触を楽しみ、道具を使って友だちと協力してダイナミックに遊ぶ。
- ・小動物の飼育や栽培している野菜の生長に気づいたり、収穫を楽しんだりする。

9月～12月

<ねらい>

- ・身近な自然や環境にかかわりながら遊ぶなかで、よく見たり、考えたり、友だちと予想したりしながら、友だちの考えも受け入れて遊ぶ。
- ・遊びのなかから出てきた課題をクラスで共有し、課題解決に向けて、考えを出し合ったり、予想を立てたり、工夫したりしながら、試していく。
- ・それぞれの行事に向けて、目的意識をもって、参加する。
- ・友だちと一緒に、予想したり、見通しを立てたりしながら、身体を思い切り動かして遊ぶ楽しさを味わう。

<内 容>

- ・園庭の動植物の様子に興味や関心をもち、栽培や世話を楽しむ。また、園外に出かけ、木の実や落ち葉などを拾い、季節の変化を感じる。
- ・遊びを楽しむなかで、出てきた課題についてクラスで共有し、そのことについて、友だちの様々な考えに触れながら、解決に向けて、予想したことを試したりさらに工夫したりしていく面白さを味わう。
- ・去年のことを思い出しながら、それぞれの行事でどのようなことをしていきたいのか話し合っていく。
- ・友だちとルールを共有しながら、ドッジボールやオニ遊びなどで、思い切り身体を動かして遊んだり、作戦を考えたりしながら遊ぶ。

【活動への環境の構成】

4月～7月

- ・スタンプの形や色などが分かりやすく、繰り返し試せるように、紙を用意する。
- ・色々な草花でスタンプ遊びをしたいという子どもの思いを受けとめ、遊べる範囲を広げる。
- ・子どもが、色々な草花を使って、満足するまで試していけるように、時間の保障をする。
- ・小動物の飼育では、子どもが見やすいように観察ケースを置く場所を設定する。また、子どもが、飼育を通して、不思議に思ったことなどを調べたいと思った時に、すぐに調べられるように、図鑑を近くに置いておく。
- ・砂場で、水を使って遊ぶ時には、遊びの様子を見ながら、水の量を調整し、使いたいだけ水を使うのではなく、限られた水の量をどのように使ったら、目的を実現できるのか、友だちと相談しながら使えるように、タライに水を入れる。

9月～12月

- ・運動会後には、運動会ごっこのなかで、自由に表現することができるように、運動会で使用した道具や曲を使いやすいように出しておく。
- ・廃材での製作では、テープで何でもくっつけるのではなく、素材によっては、糊やボンドを使ってくっつけることができるということに気づいていけるように、テープだけでなく、糊やボンド、ガムテープなども用意する。
- ・友だちと誘い合って遊びを始められるように、ボールや縄跳び、白線など、必要な用具を置く場所を決めておき、自分たちで使えるようにしておく。
- ・園外保育などで拾ってきた木の実などは、特徴や違いに気づいたり、遊びのなかで、必要な物を選んで使ったりするようになるために、種類別に分けて置くようにする。

通年

- ・日頃から、子どもが、身近な環境に自ら安心してかかわっていけるように、園内の自然環境を整備する。
- ・子どもが、身体を思い切り動かし、のびのびと遊べる、戸外遊びを充実させる。また、多様な自然と飼育、栽培活動、野外体験活動を通して、生物に触れる機会をつくる。
- ・その時その時の子どもの興味や欲求を見極め、子どもの活動から予想される計画をたて、展開に応じて、すぐに必要なものが準備できるように教材研究をしておく。
- ・子どもが、興味をもったことや不思議に思ったことを満足するまで試していけるように、時間の保障をする。
- ・子どもの好奇心を呼び起こし、探究心にもつなげていくために、地域力、自然の力を取り入れた教育活動を展開していく。

【支援・声掛けのポイント、工夫】

4月～7月

- ・子どもが、身近な環境と出会い、心動かす瞬間を見逃さず捉え、教師も子どもとともにワクワク感を味わっていく。
- ・服にスタンプをして遊んでいた年長児Aには、繰り返し遊べるように、紙を使うことを提案した。
- ・子どもの気づきや不思議に感じたことに対して、教師がこたえを言うのではなく、自分たちで試して気づいていく過程を大切にしていく。
- ・この時、年長児Aは『タンポポでのスタンプ遊び』、年長児B、Cは『様々な草花を使ってのスタンプ遊び』、年中児d、eは『ドングリ集め』に興味をもっていた。これまでの経験や成長の違いによって、楽しみ方もかわってくるため、その子が、今、何に心を動かしているのかを見極め、寄り添ったり、必要に応じて声をかけたりした。

9月～12月

- ・話し合いなどの場面では、子どもの考えを否定せず、まずは、しっかりと受けとめていく。そうすることで、子どもは、自分の考えを受け入れられる心地よさを感じ、さらに思考していくようになる。
- ・子どもが、周りに目を向けるようになってくると、たくさんの発見や気づきがでてくる。そのことをクラスで共有していくと、個々が、互いの考えを聞いて、さらに思考し、たくさんの考えを伝え始める。そのような場合には、出来る限り、その時に時間を保障していきたい。そのためには、余裕のある保育計画をたてることも大切になってくる。

通年

- ・子どもが気づいたことに、教師も同じ目線で立ち止まれる教師の心を大切にし、子どもの気づきをしっかりと受けとめ、一緒に考えたり、不思議を感じたりする時間を大切にしていける。また、このことを、クラス全体で共有する時間をもつことで、様々な気づきにもつなげていく。
- ・子どもの気づきや不思議を感じたことに対して、教師がこたえを言うのではなく、自分たちで試して気づいていく過程を大切にしていける。
- ・個々のこれまでの経験や成長の違いによって、楽しみ方もかわってくるため、その子が、今、何に心を動かしているのかを見極め、個々に寄り添ったり、時には、子ども同士をつないでいけるように、必要に応じて声をかけたりする。
- ・子どもの『やってみたい』という思いに対して、否定、抑制、禁止はせず、まずは『どこまでやらせてあげられるのか。実現できるのか』を考える。
- ・子どもに、目的意識や責任（まかせる）をもたせる環境をあたえるためには、教師の専門性、雑学の向上が不可欠となる。活動に対する事前の準備、対応、教師間の十分な話し合い、共通理解、連携を大切にしていける。

【子どもの様子】

後期

園庭にある畑で、子どもは、大根とブロッコリーを育てている。年長児Cが水やりをしていると「大発見、水が踊ってる」と、ブロッコリーの葉が水を弾くことを発見した。年長児Cは、そのことを全体でする活動の時間にクラスに伝え、実際に畑でみんなに見せることにした。

子どもは、ブロッコリーの葉の上で水が踊る様子を見て、他の葉でも水が踊るのではないかと疑問をもち、近くにあった大根の葉やキウイの葉で試してみた。しかし水は踊らなかった。その様子を見て、どうして水が踊る葉と踊らない葉があるのかということ、自分なりの考えで、教師に伝え始めたため、子どもを集めることにした。すると、自分の考えを伝える

だけではなく、友だちの考えを聞いて、さらに考えを深めていく子どもの姿が見られた。そして、身近にあったムラサキカタバミの葉を試した時、ブロッコリーと同じように水を弾いた。『どうしてムラサキカタバミは、ブロッコリーと同じように水を弾くのだろう？』と、子どもは、葉をじっと見たり、手で触ったりしながら、同じ部分や違う部分を見つけていった。その後、「この葉っぱは？」「あの葉っぱは？」と、色々な葉に興味関心をもち始めたため、園庭にある色々な葉っぱで水が踊るか試すことにした。

子どもが、試していくなかで、なかなか水を弾く葉が見つからなかった。そんな時に、年長児Bが、ボールやシーソー、自分の手などでも試し始めた。そして年長児Dが「葉っぱを裏向けて水につけると、銀色になる葉がある！」ということに気づいた。教師が、銀色になる葉に水をかけるとどうなるのかと尋ね、水をかけたところ、水が踊った。このことを年長児Dは、みんなに伝え、今まで試してきた葉を水につけてみることにした。すると、水につけて銀色になる葉は、水が踊るとことが分かった。



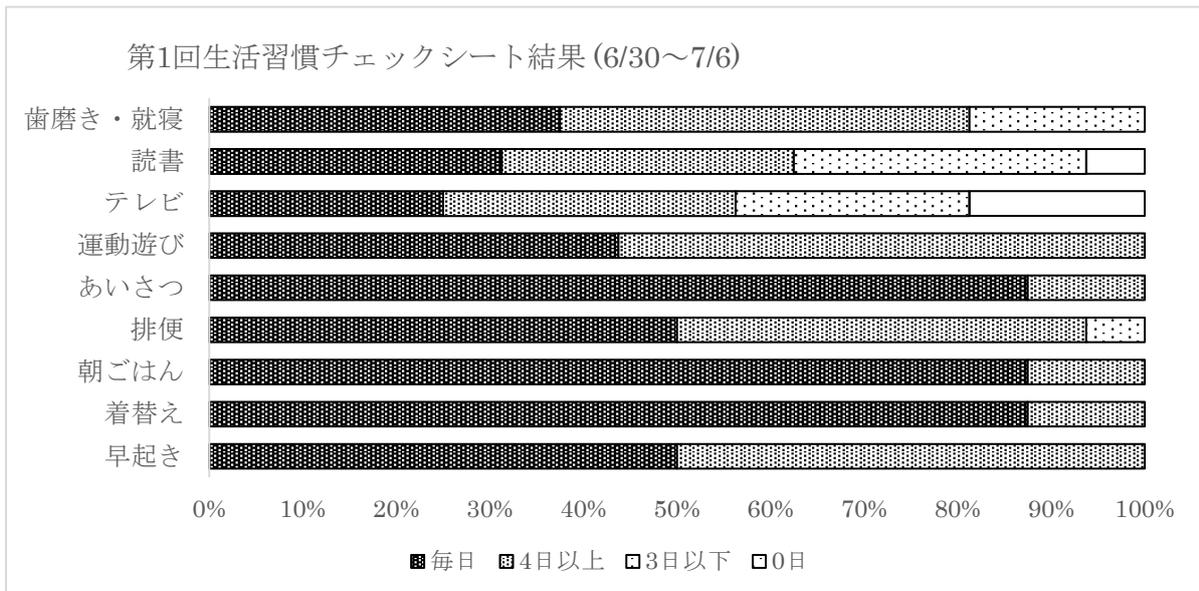
子どもは、4月から、遊びを通して、友だちや教師との信頼関係を築いてきた。この信頼関係が『安心』につながり、安心できる環境のなかで過ごしていくことで、周りの様々なものに目が向くようになっていった。そして、安心できる環境のなかで、様々な事象に対して、自分の考えを自由に出し合い、友だちの考えを聞いて、さらに考えを深め探究していく姿が見られるようになっていった。

三学期に入ると、これまで経験した遊びをさらに発展させ、目的に向かって、自分たちだけで遊び込む姿が見られるようになっていった。例えば、11月から3月まで継続して楽しんだ遊びに、ビー玉転がしがある。二学期は、廃材を使ってコースを作り楽しんでしたが、三学期には、積み木でコースを作って楽しむようになった。その中で年長児Fは、スタート位置を高くし、傾斜のついた部分の距離を長くした方が、ビー玉が勢いよく転がることに気付いた。その後、年長児Fは、廃材を使ってコースを作ったが、そのコースは二学期に作っていたコースよりも高さがあり、傾斜もついていた。その様子を見ていた年中児dは、年長児Fと同じコースを作って楽しむ姿があった。その後、二人は、もっとビー玉が長く転がるように「ここつなげよう」「でも、こっちのが、いいんちゃう?」「あっ、分かった!こうやったらいいんや!」と、試行錯誤を繰り返しながら、コースを作っていった。

事例に限らず、年間を通して、様々な場面でこのような姿があり、日々の遊びの中で、身近なものに好奇心をもって、感じたり、考えたりしながら、探究していくという思考力の芽生えがみられた。

4月から、クラスとして、『友だちや教師との信頼関係作り』『安心して自分をだせる場所作り』『自分の思いを安心して言える関係作り』を大切にしてきた。また、『相手の考えや思いを聞くことの大切さ』も伝えてきた。そして、教師は特に『子どもの気づきや発見を(すごいこととして)受けとめること』『子どもの考えを認めること』を大切に『考え合う時間』をたくさんもつようしてきた。その結果、子どもは、自分の考えや思いを安心して出し合い、相手の考えを聞いて、さらに自分の考えを出したり、試行錯誤を繰り返したりすることで、よりよい考えが出てくるという経験ができ、そのことが喜びにつながっていくようになっていったと思う。

【生活習慣チェックシート結果から見られた課題】



本園は、上記のグラフからも読み取れるように、基本的な生活習慣が安定しており、ほとんどの項目において、半数以上の幼児が7日中4日以上実施できたと回答している。

そのなかで「うちのひとといっしょにほんをよむ」の項目では4日以上実施できなかったという回

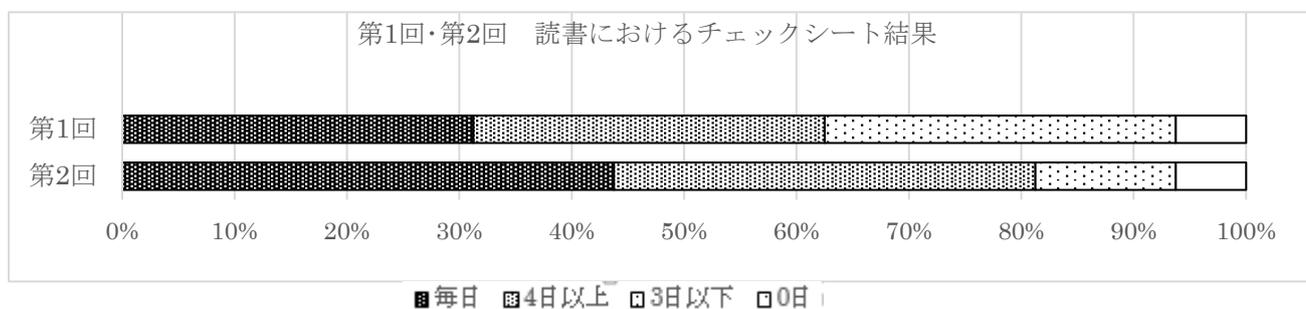
答が37.5%。「テレビを見る・ゲームをするじかん ふんいない」の項目においては、43.75%おり、1日も実施できなかったという家庭がどちらの項目にもいた。

そこで、この項目2点を当園の課題とし、読書習慣の大切さやメディアが健康に与える影響等について、通信で保護者に啓発をはかり、読み聞かせを実践する保護者を増やす取り組みと1日のテレビの視聴時間及びゲームにかける時間の削減に取り組むことにした。

【生活習慣の向上にむけた取組とその成果】

取組 1 「おうちの人と一緒に本を読む」ことを充実させる

通信による保護者への啓発とともに、幼稚園の貸し出し絵本の実施回数を週1回から週3回に変更した。貸し出し絵本の回数を増やしたことで「毎日、一緒に絵本を読むことができました。」「本をたくさん一緒に読めました」「貸し出し絵本のおかげで、本を読む回数が増えました」という感想が聞かれ、第2回のチェックシートの結果では4日以上実施した家庭が18.75%増え、全体では81.25%の家庭が実施できたという結果になった。

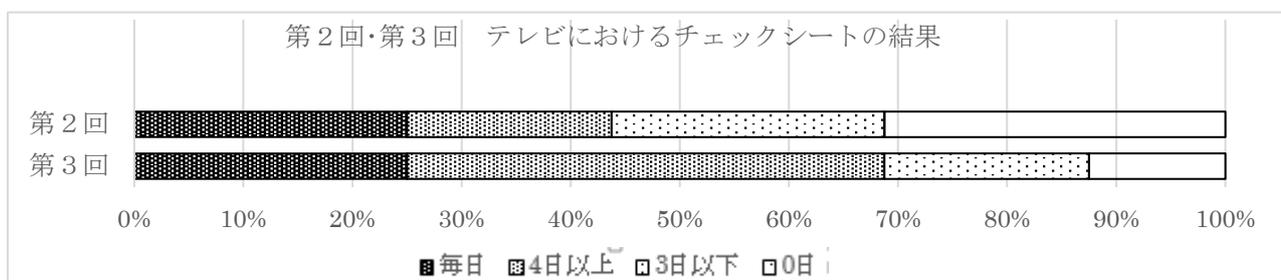


取組 2 「テレビをみる・ゲームをする時間」を改善させる

第1回・第2回を分析したところ、各家庭の設定時間を無理に短くしてしまい、実施できなかったり、だらだらと時間が長くて駄目だったことがわかったので、第3回生活習慣チェックでは、事前に通信で今までのチェックシートの結果を伝え、時間設定の改善と保護者の意識改善を訴えた。

すると、各家庭の生活に合わせた時間設定がみられ、60分、90分で取り組もうとする姿がみられ、4日以上実施できたという家庭が第2回目よりも25%増え、全体では68.75%の家庭で実施できた。

保護者からは、「テレビを見る時間を減らし、体を動かして楽しむ時間が増えた。」「ゲームをする時間を守れるように、時間を気にしながらゲームをすることができました。」「テレビを見たり、ゲームをする時間が前よりも短くなり、そのぶん手先を動かしたりして物づくりに集中して作ることができました。」などの感想がかえってきた。



【小学校との連携方法】

小学校に併設されている当園では、小学校の規模も小さいことから、行事等での交流が積極的になされている。また、小学校に入学したときにスムーズに学校生活に入れるように、入学前から行事だけでなく、様々な取り組みを行っている。

取り組みを通して、少しでも就学前、入学後の不安が軽減できればよいと考えている。

まずは、小学校のお兄さん、お姉さんと顔見知りになることをねらいに、入園と同時に小学校の縦割り班（全校生徒を12班に分け、幼稚園児から6年生までを1班とする）に入る。小学校と合同の春の遠足や児童集会等は、縦割り班で行動する。わくわくタイムという時間を設定し、原則毎週金曜日の業間に一緒にお兄さん、お姉さんの考えてくれた遊びに参加し、縦割り班活動を楽しむ。そこで名前と顔を覚えてもらう。

わくわくタイム
の様子



幼稚園の園庭で
の様子



縦割り班活動とはべつに、園児が入学したときに最高学年となる5年生との交流を年間で数回、設定している。この活動では、園児にとっては、お兄さん、お姉さんと仲良しになることで安心感をもたせることがねらいであり、5年生にとっても、自分たちが頼られる存在であることを知り、最高学年となる自覚をもたせるといふねらいがある。

小学校のプールで
の様子



相互にメリットがあり、小学校の先生とも事前の内容検討や準備を密に行えることから、ここ数年は特に重点をおいている。

次に、就学前に、小学校の生活を知ったり、感じたりすることができるように、幼稚園と小学校が合同で行事を行ったり、互いの行事に参加しあったりできる年間行事を決めている。活動に参加することで、大きくなる喜びや楽しみを知らせることがねらいである。

また、小学校生活のなかでつまずきがよくみられる給食に関しても、当園は自校調理園校であり、同じ給食を食べているので、入園から就学まで1年間かけて、小学校の給食時間内に食事が終わられるようにかかわっていく。

ハロウィンの様子



椿ワールドの様子



(交流の年間実施計画)

1 学期	幼稚園、1年生と迎える会に参加	児童会行事
	春の遠足に行く	園、学校行事
	茶摘み	低学年と交流
	幼稚園で遊ぼう	5年生と交流
	小学校プールで生き物救出作戦	低学年と交流
2 学期	合同運動会	園・学校行事
	合同運動会（幼稚園・5年生合同競技）	5年生と交流
	ハロウィンパーティー	低学年と交流
	焼き芋	5年生と交流
	椿ワールド(英語活動発表会)	園・学校行事
	クリスマス児童集会	児童会行事
	餅つき	5年生と交流
3 学期	マラソン大会	園・学校行事
	新入児交流会	学校行事
	お楽しみ会	5年生と交流
通 年	わくわくタイム（原則金曜日の業間）	縦割り班活動

最後に、小学校との連携において一番大切にしなければいけないことは、ただ行事や活動を実施するのではなく、幼稚園も小学校も互いの学びについて、職員同士が理解を深めることだと考えている。

そこで、毎回、小学校の職員会議に参加したり、公開保育、公開授業への参観をしたり、就学のための引継ぎ会議も行っている。

(成果と課題)

就学までのねらいとして、園児と小学生が顔見知りとなり、小学校の生活や行事を知ることについては、幼稚園も小学校も年間行事として位置づけられ、定着してきたと思われる。回を重ねるごとに子どもにとっても楽しい活動となってきた。小学校への不安が払拭され、小学校生活への期待もふくらんできていることから、これらの取り組みは、入学後のスムーズな学校生活にもつながっていくと考えられる。引き続き取り組みの継続と、より一層の内容の充実を図っていきたい。

その一方で、就学前として育てたい（育てなければいけない）力を考えたとき、様々な場面においての子どもの内面理解、個々の育ちの保障については、小学校の先生と子どもに対するかかわり方や考え方が必ずしも一致しているわけではない。

それは、幼稚園と小学校との生活の違いにあると思われる。互いに違いを理解するところからはじめの必要があると考えている。そのためにも、互いの保育、授業の公開参観をはじめ、実践の交流を重ね、互いの違いを知ったうえで、接続期の子どもの姿や課題について話し合っていきたい。

思考力の芽生えは、小学校学習指導要領の総則において「思考力、判断力、表現力等を育成すること」として、目指す資質・能力にあげられている。幼稚園においては、楽しく遊ぼうとする意欲や生活等のなかで心を動かしたことに対して、疑問に思ったり、不思議を感じたりし、探究しようとするのが思考力となり、よりよく学ぼうとする主体的な態度につながっていくと考えられる。知識を教えるのではなく、知識を吸収できるだけの土台づくりに努めていきたい。

【学識経験者より】

鈴鹿市立椿幼稚園

「指示を与えられないとやらない」「マニュアルに沿ったことはできるけれど、マニュアルから外れると途端にできなくなる」、そうした人たちが近年増えていると言われていています。その傾向は子どもよりもむしろ大人にこそ強いのではないのでしょうか。思考力そのものが危機的状況にあるのです。鈴鹿市立椿幼稚園の取り組みの根底には、そうした問題意識が明確に流れていることが、実践の端々から感じられます。

本来子どもは好奇心や探究心の旺盛な存在であり、気づきや発見の名人でもあります。気づきや発見をもとにしてあれこれと考えることは子どもにとって喜びであり、その喜びの体験を充実させてやることは幼児教育者の重要な役割の1つであると考えられます。子どもはこうした喜びを主体的・対話的に積み重ねる中で、考えることや学ぶことに対して意欲的になっていきます。しかし、現代の家庭教育も含めた幼児教育全体を見渡すと、こうした機会は必ずしも子どもにおいて十分に保障されていません。他方、椿幼稚園の取り組みは、まさにこうした機会を十分に保障しようとするもので、子どもの思考力の基礎を幼児期にしっかりと育てようとするものであると言えます。

年度の当初の実践では、子どものちょっとした気づきや発見を教師が逃さず、それを子どもの主体性を損なわないかたちでごく自然に遊びへとつなげていき、そこから得られた1人の楽しさを仲間との楽しさへと広げていくことで、遊びそのものもさらに充実させることに成功しています。子どもは自らの気づきや発見が仲間との楽しい遊びへと発展していくことを経験的に知ること、もっとやりたい、もっとやってみようという気持ちを駆り立たせていきます。以降の取り組みでは、子どものやりたい思いをていねいに汲み取りつつ、仲間との楽しい遊びへとつなげていくことを教師は重視しながら進めています。そして、年度の終わり頃の実践では、子どもは教師の手をそれほど借りなくても、独力で自分の思いや考えを次々と仲間へ披露し、仲間もそれを受け止め、遊びや活動がより楽しく納得のいくものとなるように自分たちで進めています。これまでの積み重ねが見事に花開いていることがよくわかります。

小学校以降の教育とは異なり、幼児教育は遊びや生活経験を通して総合的にさりげなく学んでいくという点に特徴があります。教科学習のように系統的に学ぶ内容が決まっているわけではなく、あくまでも子どもの興味・関心に沿って展開し、その内容も子どもなりの見方や考え方を大切にします。正解を追い求めるものでは決してないのです。しかし、だからと言ってなんでもよいというわけではありません。教師の役割は子どもなりの見方・考え方を、遊びや生活経験を通して充実させていくことにあります。そこで感じた喜びや楽しさが、小学校以降の学びに向かう力につながっていきます。幼児教育から小学校教育への接続期にかかわる教師は、そのことを十分に理解しておく必要があり、そのために椿幼稚園の実践成果報告は大いに役立つことでしょう。

4月26日(木)

『もう一回しよ〜!』<実践 1-1>

～身近な草花を使って遊ぶ子どもたちの姿から～

<ねらい>・身近な草花に興味をもつ。

<教師の思い>・自然は、たくさんの面白さがある。たくさんの興味をもってほしい。

9:30～9:45

※大文字…5歳児 小文字…4歳児

自ら選んでする活動の時間に、つばき園で遊んでいた。

A児:「先生、見て! スタンプ!」

教師:「スタンプ?」

A児は、教師のエプロンに、ポンッ! とスタンプをするかのようにタンポポを付けた。すると、エプロンに黄色の色が付いた。

教師:「わっ! 本当! スタンプみたい!」

A児:「もう一回しよ〜!」

A児は、自分の服にもタンポポの花をポンッと押した。

教師:「A児、面白いけど、服につくと、とれなくなるかもしれやんで…紙もってくるわ!」

教師が紙を取りに行った。

<心の動き・教師の読み取り>

<気づき>

・タンポポの花を服につけると、スタンプのようになる。

<教師の思い・援助>

- ・A児は、この数日前より、登園時に草花を摘んできては、名前を調べるという姿が見られていた。このことから、草花に興味を持ちだしているのだと感じた。
- ・A児の気づきは面白く、教師もワクワクしながら、一緒に楽しむことにした。
- ・花粉が服について、スタンプのようになった。でも、花粉が取れないと困る。また、服よりも紙の方が、色や形が分かりやすいのではないかと思い、紙を用意した。

『よし、試してみよう!』<実践 1-2>

～身近な草花を使って遊ぶ子どもたちの姿から～

<ねらい>・身近な草花の不思議に気づき、試してみようとする。

<教師の思い>・自然のなかには、たくさんの不思議がある。不思議と感じる心を培っていききたい。

9:45～10:30

※大文字…5歳児 小文字…4歳児

教師が紙をもってきて、A児と遊んでいると、B児、C児もやってきて、

B児:「本当だ! スタンプみたいだね～。僕もやってみよ～」

C児:「タンポポの葉っぱは? …あっ! 緑色になった!」

B児とC児は、タンポポの花でスタンプ遊びをしばらくした後『もっとスタンプ見つけに行こう!』と、つばき園でサザンカの花や、オオイヌノフグリ、ヘビイチゴ、草を摘んだ。そして、小学校にサクラランボがあることを思い出し、サクラランボや近くにあったフジの花を摘んでつばき園に戻った。

B児:「よし、試してみよう!」

B児とC児は、集めてきた草花やサクラランボなどを使って、スタンプをし始めた。そこへ、ドングリを拾って遊んでいたd児とe児がやってきた。

<心の動き・教師の読み取り>

<教師の思い・援助>

B児/C児 <興味関心><疑問>
・タンポポのスタンプをやってみたい!
・葉っぱはどうなるんだろう?

・A児と教師が楽しそうに遊んでいるのを見て、B児とC児はやってきた。身近な草花でスタンプができるということが、子どもたちにとって、魅力的で、やってみたいと思ったのだろう。
・タンポポの花だけでなく、葉でもできないか試してみたくなったのではないか。子どもたちが、試していく姿を見守ることにした。

B児 <興味関心>
・もっと、スタンプがしたい!
・色々なもので試してみたい!
C児
・つばき園だけでなく、小学校にも色々なものがある。

・B児とC児は、タンポポだけではなく『他のものでもスタンプがしたい』という思いがでてきた。始めは、つばき園で草花を摘んでいたが、2～3日前から「小学校のサクラランボを食べたい」と、色づき始めたサクラランボを摘んできていた子たちのことを思い出したようであった。そして「サクラランボでもスタンプがしてみたい」と思ったのだと思う。「小学校へ行きたい」と言いに来たため、子どもたちの思いを受けとめ小学校へ行ってもよいことを伝えた。

B児/C児 <試す>
・それぞれ集めてきたものは、スタンプできるかな?

・B児、C児が、どんどんと試していく姿を見守っていく。そのなかでの気づきを受けとめていく。

『できやんな〜…』<実践 1-3>

～身近な草花を使って遊ぶ子どもたちの姿から～

<ねらい>・年長児の姿を見て、身近な草花の不思議に気づく。

<教師の思い>・不思議を感じる心を培っていきたい。

※大文字…5歳児 小文字…4歳児

d児とe児は、B児とC児が遊んでいる姿を見て、
d児:「不思議〜！魔法みたいになるな」
e児:「どうしてスタンプになるの？…色がついとんでかな？ドングリもできるかな？」
そして、d児とe児は、ドングリを拾いに行き、スタンプをしようとしたができなかった。
d児:「できやんな〜…」
B児:「これ(タンポポ)ならできるよ！」
d児とe児は、タンポポでスタンプできたことで、満足したようで、また、ドングリを拾いに行った。

<心の動き・教師の読み取り>

d児/e児 <疑問・予想する>
・不思議！魔法みたい。
・どうしてスタンプになるの？色がついているから？

d児/e児 <予想する>
・ドングリでもできるかな？

d児/e児 <試す・気づく>
・ドングリはできない。

<5歳児>
・タンポポはスタンプできると伝える。
<4歳児>
・真似る→試す→成功→満足

<教師の思い・援助>

・5歳児が、スタンプ遊びをしているのを見て、4歳児は不思議を感じている。5歳児は、遊びを進めていくなかで、スタンプができるもの、できないものがあることに、気づいてきている。それに対し4歳児は、色がついているものなら、どんなものでもスタンプにできていると思っている。そして、ドングリ拾いをして遊んでいたこともあり、ドングリでもできるのでは？と考えた。4、5歳児の考え方の違いに気がついた。

また、5歳児は、探求していくことに楽しみを感じているのに対し、4歳児は、スタンプよりも、ドングリ拾いということに興味をもっているため、一度スタンプが成功したことで満足して、また、ドングリ拾いにもどっていった。教師がこたえを言うのではなく、自分たちで試して気づいていく過程を大切にしていく。

『赤いクレヨンみたいだね！』<実践 1-4>

～身近な草花を使って遊ぶ子どもたちの姿から～

<ねらい>・身近な草花の不思議に気づき、試してみようとする。

<教師の思い>・自然のなかには、たくさんの不思議がある。不思議と感じる心を培っていきたい。

※大文字…5歳児 小文字…4歳児

今度は、ヘビイチゴでスタンプをしてみることにした。B児が、ヘビイチゴをそのまま紙にスタンプしたが、色がつかなかった。
B児:「できないね…」
C児:「中にイチゴが入ってるみたい。ぜったいつくよ！そと取ろう！」
中身だけを出し、スタンプした。
C児:「色が付いた！」
B児:「赤いクレヨンみたいだね。次は、この花(フジ)もやってみよう」
教師:「クレヨンみたいか～…本当だね」

<心の動き・教師の読み取り>

B児/C児 <興味関心>
・ヘビイチゴは、どうだろう？

<教師の思い・援助>

・自分たちが試したいと思い、摘んできた草花であるので、子どもたちがワクワクしながら試す姿や気持ちに共感していく。

B児/C児 <試す>
・できない。

B児/C児 <予想する>
・中にイチゴがあるから、できるはず！

・今までの経験から、イチゴは、皮から赤い果汁が出て、色がつくと分かっているので、このように思ったのではないかと考える。自分の経験と結び付けて考えることの積み重ねは、思考力にもつながっていくのではないか。

B児/C児 <試す>
・できた！でも、今までのスタンプと違い、クレヨンみたい。

・今までの植物と違い、どうしてクレヨンようになったのかということよりも、子どもたちが、日常の経験に結び付けて考えた言葉からは、思考をしていることが感じられる。

『色が変わった!』<実践 1-5>

～身近な草花を使って遊ぶ子どもたちの姿から～

<ねらい>・身近な草花の不思議に気づき、試してみようとする。

<教師の思い>・自然のなかには、たくさんの不思議がある。不思議と感じる心を培って
いきたい。

※大文字…5歳児 小文字…4歳児

フジの花も同じようにしてみると、
C児:「紫になった! …あれっ? 青になったよ!」
B児:「えっ! ?どれ? 本当だ! 色が変わった!! 色が変わったよ!!」
C児:「何でだろう…?」
教師:「本当だね…不思議…何で!? 面白いね～」
C児:「(サザンカは)ピンクかな～?(サザンカの花びらを紙にこすりつけてみる)紫だ～!」
教師:「えっ! 紫なの? もう一回見せて!」
C児:「ほらっ! あれ? ピンクだ…あっ, 色が変わった! 紫になった!」
教師:「何でだろうね…不思議だね」
B児:「うん, 不思議だね～」
この後もしばらくスタンプ遊びは続き, 色が変化する不思議さを味わった。

<心の動き・教師の読み取り>

<教師の思い・援助>

B児/C児 <興味関心>
・フジの花は, どんなスタンプになるだろう?

・クレヨンのようになる植物もあった。『フジの花はどうなるのだろう』と, B児とC児がワクワクしている思いが伝わってきたので, 教師もワクワクしながら見守った。

B児/C児 <試す>
・スタンプできた!
<新たな気づき・疑問>
・色が変わった。何でだろう?

・子どもたちは, 今までの経験から, スタンプは, 素材と同じ色になることを感じている。しかし, 色が変わるという事象に, とても不思議を感じている。教師も子どもたちの気持ちに共感し, 受けとめていくとともに, 不思議と思う気持ちやワクワク感を一緒に味わっていく。

B児/C児 <予想する・試す>
・また色が変わった。
・不思議さを味わう。

<考察>

- A児は、まだまだこのスタンプ遊びを続けていたので、教師はA児に寄り添った。同じ5歳児でも、今までの経験によって、成長や発達は違うので、個々によって楽しみ方は変わってくる。ここで教師がA児に、B児やC児と同じような体験を求めたとしても、A児の心が動かなかっただろう。個々の育ちを受けとめ、今、その子が何に心を動かしているのかを見極めることが大切である。
- 4月ということもあり、今は、不思議をたくさん感じながら、自分なりに、考えて試してほしいと思った。今の時期は、不思議な事象を目の前に、一緒に感動する友だち同士をつなげることが、今後の思考力の芽生えを培っていくなかでの、人間関係に繋がる第一歩なのではないかと思う。
- 子どもたちの『不思議だな』『何でだろう？』『試してみよう！』という気持ちが、今後『もっと試してみたい！』という、探求していく力へとつながっていくと考える。そのためには、教師が、子どもたちの気持ちにじっくりとかかわり、時間と空間を保障し、共に心を動かしていくことが大切である。
- 教師は、子どもの疑問に、こたえを出したり、こたえを導いたりするのではなく、子どもたちからの言葉や姿から、必要に応じてヒントを少しずつ出していけるようにすることが大切である。



11月8日(木)

『大発見！水が踊ってる』<実践2-1>

～大根の水やりで発見したことをクラスで共有し、主体的に発見を楽しんでいく姿から～
<ねらい>・日常の中で見つけた不思議を、クラスみんなで共有する。

・水が踊る葉っぱの『なぜ』『どうして』『不思議』を感じる。

<教師の思い>・身近な環境にかかわる中での気づきや発見を大切にしたい。

10:25～10:50

※大文字…5歳児 小文字…4歳児

自ら選んでする活動が終わり、クラスで育てている大根とブロッコリーに水やりをした。

C児:「先生、来て～！大発見！！水が踊ってる。見てて」

教師:「わあ～、本当！面白いね～。水が踊ってる！！」

副にいた子:「本当だ！踊ってる！！」

教師:「A児、大発見！みんなに教えてあげようよ！」

C児:「うん！！C児が教えるね！！」

<全体でする活動の振り返りのなかで>

教師:「C児がすごいことを発見したんだよ」

C児:「ブロッコリーの葉っぱに水をかけると、水が踊るんだよ」

見ていた子:「そうだよ。本当に踊るんだよ」

見ていなかった子:「・・・？」

教師:「C児、畑に行つて、みんなに見せてあげる？」

C児:「うん」

<心の動き・教師の読み取り>

<教師の思い・援助>

C児 <気づき><疑問>

大根の葉っぱに水がかかった時と違い、ブロッコリーの葉っぱに水がかかると、水が踊る。

『なんでだろう？』『不思議だな』

・C児の興味、ワクワクを教師自身も感じた。このC児の気づきを大切にしたい。

・自分が見つけたというC児の自信をクラス全体に伝えることで、さらに興味、関心がわいてくるかもしれない。クラスで共有したい。

C児

発見したことをみんなに伝えたい！

・C児自身の言葉で伝える姿を大切に見守りたい。相手に伝わる喜びを感じてほしい。

・C児の水やりを見ていた子はC児の言っていることが分かるため、イメージすることができる。しかし、見ていなかった子は、言葉による説明だけではイメージがもちにくいのではないか。実際に見ることで、C児の思いが伝わるのではないかと思ひ、畑に行くことを提案した。

・実際に見ることで、この不思議をクラスで共有できるのではないか。水の動きに、心が揺さぶられるのではないか。

『やってみよう!』<実践2-2>

～大根の水やりで発見したことをクラスで共有し、主体的に発見を楽しんでいく姿から～
<ねらい>・考えたことをみんなに伝えたり、友だちの考えを聞いて、自分の考えをさらに深めたりしていく。

<教師の思い>・自分たちの考えをみんなに伝えてほしい。
・色々な考えがあることに気づいてほしい。

10:50～11:30

※大文字…5歳児 小文字…4歳児

子どもたちは、畑へと向かった。C児が、ブロッコリーの葉に水をかけると、葉っぱの上で水が踊りながら、下に落ちていった。その様子を見て、C児の言っていたことを理解した子どもたちは、『他の葉でも踊るのではないかと』疑問をもち、近くにあった『大根の葉』や『キウイの葉』で試してみることにした。しかし、『大根の葉』『キウイの葉』では、水は踊らず、水は、ダラーっと流れてしまった。



キウイの葉は、ボコボコしているけど、ブロッコリーの葉は、ボコボコしてないから、踊りながら流れるんじゃない？大根の葉っぱは、チクチクしているから、水の栄養が取られて割れる(粒にならない)。

キウイの葉っぱは、手で触ったら、チクってした。だから、キウイの葉っぱは、水の粒が割れてしまう。空気が水を丸めているのではないかと思った。風船も尖ったもので刺したら割れる。だから、チクってしたのがあると、水を丸めている空気が割れて、水の粒も割れるとか？



大根の葉っぱは、A児も言っていたけど、チクチクしている。大根の葉っぱとブロッコリーの葉っぱを一緒に手で触ってみたら、ちょっとだけチクってなった。チクチクだから、D児みたいに水の粒が割れて、水が落ちるのかな？



じゃあ、(サザンカの葉を指さして)これは、水をかけても落ちない(踊る)のかも？これはツルツルしてるよ。

そうかも！やってみよう！！



しかし、サザンカの葉に水をかけたが、水は踊ることなく、ベチャーンとなって流れていった。



ツルツルし過ぎているんじゃない？

もっとツルツルしないとダメとか？



そんなにツルツルすぎると、ベチャってなりすぎるんじゃない？

こういう(サザンカ)葉っぱとかは、よく見たら、線がある。線がないやつだったら、できるんじゃない？



ブロッコリーの葉っぱは、線がないのかな？あるのかな？

あ…あるか…

<心の動き・教師の読み取り>

自分の考えたことを伝えたり、友だちの考えを聞いて、自分の考えに自信をもったり、様々な考えがあるということに気づき、さらに探求したりしている。

<教師の思い・援助>

C児・H児・G児・J児

実際に葉を触ったり、友だちの話を聞いたりして、**仮説**をたてる

<仮説>

・チクチクだから、水の粒が風船みたいに割れたのではないかな。

・水が踊りながら、落ちていく葉っぱと、そうはならない葉っぱがあるという事象を見た子どもたちが、実際に葉っぱを触ることで、『葉っぱ』と言っても、色々な違いがあることに気づき始めている。そして、自分たちが、実際に触って、気づいたことをみんなに教えたいと思っている。その気持ちを受けとめ、みんなに伝える時間をもつ。

・子どもたちが手で触って感じたことや、今までの経験から知っていることと組み合わせて、考えたことを伝えようとしている。その姿を大切に见守る。
・自分の言葉で伝えることを大切にしていけるが、分かりにくいところは、言葉を付け加えるなどして、分かりやすく伝えていく。
・自分の考えだけでなく、友だちの考えも受け入れて、伝えている姿から、友だちの思いに共感していることが分かる。
・一生懸命伝えようとしている子どもの姿を大切にしたい。そのためにも、周りの子の聞く姿勢についても、声をかけていく。

m児 **話を聞いて<予想する>**

・ツルツルしているサザンカの葉に水をかけたら、水は踊るはず！

・子どもたちが、実際に葉っぱを触って気づいたことを検証できるのではないかな。実際にやってみることが大切である。

仮説の検証・結果 ツルツルしていても水が踊らない。ベチャーンってなった。

B児・J児<予想する>→g児<予想する>→<気づく>

・結果を受け、さらに考えを巡らせている子どもたちの姿や、新たな仮説を立てる子どもたちの様子を見守っていく。また、時間の確保もしていく。
・B児、J児の新たな予想は、結果を実際に見て、さらに今までの経験などを思い出し、その経験と結び付けて(ブロッコリーの葉を触った感触は、サザンカの葉ほど、ツルツルしていないという経験)さらに考えを深めていると考える。このことから、実際に経験することは、心にも残ると分かる。

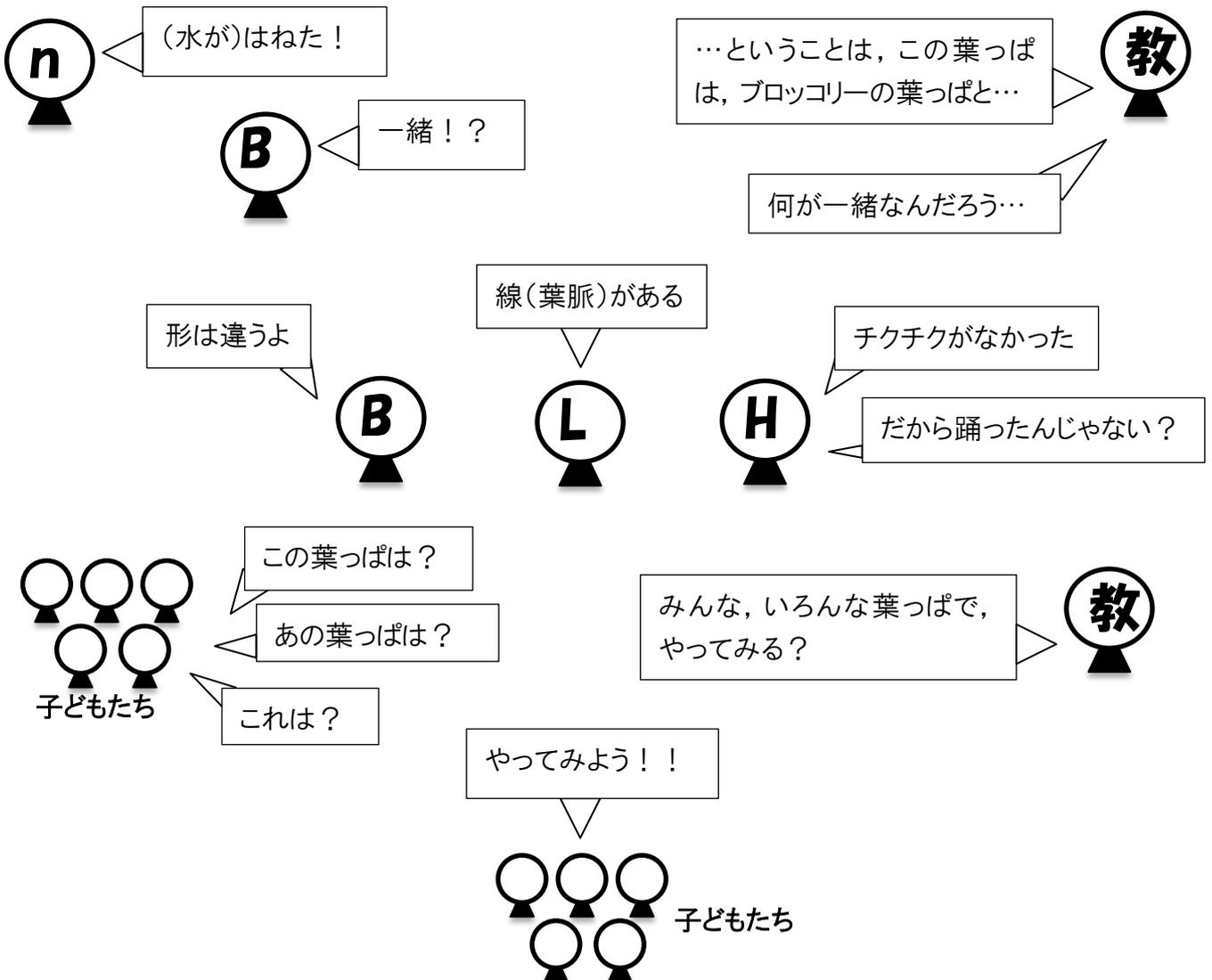
『やってみよう!!』<実践2-3>

～大根の水やりで発見したことをクラスで共有し、主体的に発見を楽しんでいく姿から～
 <ねらい>・疑問に思ったことを主体的に試していく。

<教師の思い>・楽しみながら、疑問に思ったことを自分で試したり、友だちが試しているのを見たりして、試行錯誤していってほしい。

※大文字…5歳児 小文字…4歳児

この後、子どもたちは、自分たちのいた場所に生えていた草で試した。初めに試した草は、ヒゲのようなものが生えていて、水は踊らなかつた。しかし、次に見つけたムラサキカタバミの葉は、ツルツルしていた。水をかけると、ブロッコリーの葉のように水が踊った。



<心の動き・教師の読み取り>

・身近にあった葉で試すことで、子どもたちからは、色々な気づきがでてきた。
 ・もっと、水が踊る葉っぱがないか探したい!

<教師の思い・援助>

・子どもたちは、今までの過程で、心が揺さぶられているのを感じた。そして、もっと、水が踊る葉を探してみたいと、ワクワクしている。そこで、タライに水を入れ、ジョウロを用意し、みんなが色々な葉で色々な場所で試せるように環境を用意し、時間をもつことにした。

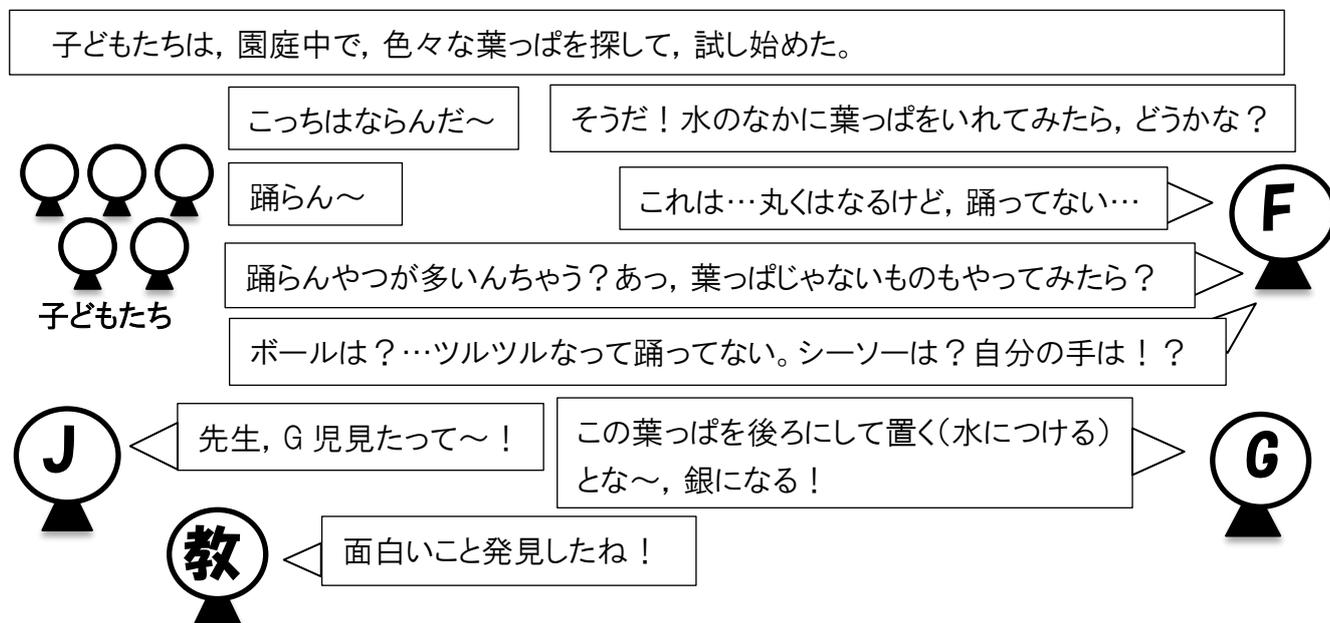
『銀になる!』<実践2-4>

～大根の水やりで発見したことをクラスで共有し、主体的に発見を楽しんでいく姿から～

<ねらい>・疑問に思ったことを主体的に試していく。

<教師の思い>・楽しみながら、疑問に思ったことを自分で試したり、友だちが試しているのを見たりして、試行錯誤していったほしい。

※大文字…5歳児 小文字…4歳児



<心の動き・教師の読み取り>

・色々,探そう!もつと試そう!

<教師の思い・援助>

- ・子どもたちは、ジョウロを持って、色々な葉を探して水をかけていた。子どもたちは、自ら考え探した葉っぱは、どれも、身近にある『葉脈があり』『チクチクしておらず』『ある程度ツルツルの葉』であることが分かった。今までの過程のなかで、子どもたちが、水が踊る葉っぱの条件を理解していることが分かった。
- ・子どもの気づきに教師も気づかされた。子どもの気づきに共感していく。また、教師の知らないことについて、教師は、知識として知っておくことは必要である。教師間で連携をとって、すぐに対応できるようにすることが大切である。
- ・J児は、葉に水をかけるだけではなく、水に葉をつけるということをはじめた。教師は、水が踊る原因の一つに撥水効果も関係していると思っていた。もしそうならば、水のなかに入れることで、新たな気づきにつながるかもしれないと思い、J児の姿を受けとめた。
- ・F児は、自ら色々な葉に水をかけることはなかったが、「踊らんやつが多いな」の言葉から、周りの子どもたちが試す姿を見ていることが分かった。そして、近くにあったボールなど、葉っぱ以外にも水が踊るのではないかと考えたのだと思う。そのようなF児の姿を大切にしたいと思い「面白そう」と声をかけた。
- ・J児もG児と一緒に場所において、G児が気づいたことをF児も見ている。H児は、G児の新たな気づきをG児と同じように嬉しく思い、教師を呼びに来たのであろう。友だちとの関係ができていからこそ、心を通わせることができたのだと思う。

『銀になってる!』<実践2-5>

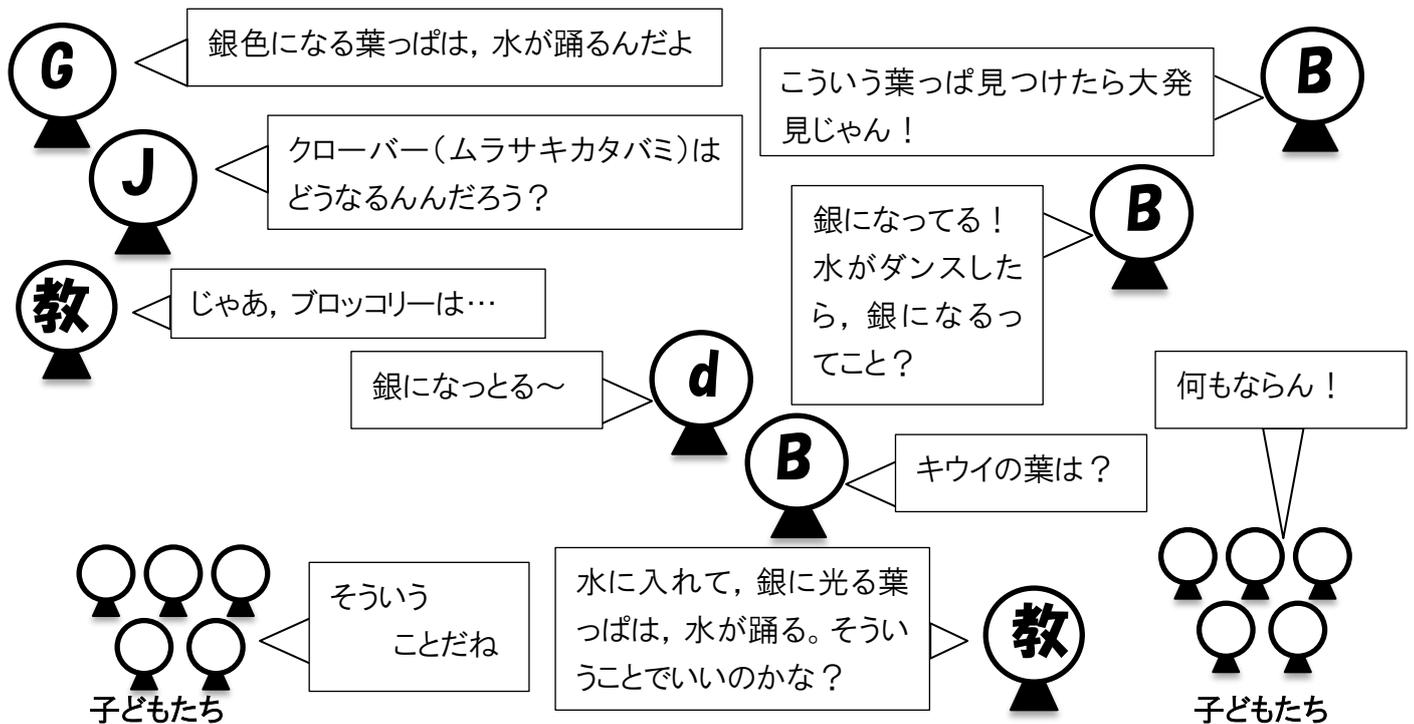
～大根の水やりで発見したことをクラスで共有し、主体的に発見を楽しんでいく姿から～

<ねらい>・水が踊る葉っぱの共通点に気づく。

<教師の思い>・みんなの気づきから、一つの結果に繋がったことを感じてほしい。

※大文字…5歳児 小文字…4歳児

教師は、E児が見つけた葉っぱに、水をかけるとどうなるのかと尋ね、水をかけた。すると、水が踊った。子どもたちを集め、E児がこのことをみんなに伝えた。



<心の動き・教師の読み取り>

G児 新たな気づき
・葉っぱを裏向けて水につけると、銀色になる。



逆の発想?から検証
・水に入れて銀色になる葉は、水が踊るといことが分かった。では、水が踊ったブロッコリーとムラサキカタバミの葉も水に入れたら銀色になるのか?



・水に入れた時に、銀になる葉っぱは、水が踊ると分かった。

<教師の思い・援助>

・新たな気づきにワクワクしている子どもたちの姿があった。この様子をしっかりと受けとめ、教師もワクワクしながら、『今、試していることは、水が踊る』ということをおぼれていないかと思ひ「水をかけたら…」と声をかけた。

・子どもたちの発見が、C児の発見したブロッコリーやムラサキカタバミでもできるのか、検証したいと思ひ、声をかけることにした。

・一人の子の気づきから、自分で考えたり、友だちの考えを聞いたりして、楽しみながら、実際に試していくことは、子どもたちの心に残るものだと思ひ。

<考察>

- この活動では、5歳児が中心となり、自分の考えを伝えたり、試したりしてしていた。4歳児も、初めの方では、自分の思いを伝えたり、気づいたことを口にしたりしていたが、時間が長くなってくると、どうしても飽きてしまったりする様子も見られた。しかし、違う行動をしていても、教師の言葉がけで、さっとこの活動に入ってくる姿から、心は動いていることが分かった。目に見えやすい活動面でとらえるのではなく、心でとらえていくことが大切であると気づいた。
- 大人にとって何気ないことでも、子どもにとっては、宝物のような気づきになることがある。子どもたちの『なぜ?』『どうして?』の疑問に対し、教師がこたえを言うのではなく、自分たちで、色々試し、考え、友だちの思いを聞き、さらに考えを深めていくためには、日々の子どもたちの人間関係が築かれていなければ、することができない。思考力の芽生えを培うためには、人間関係もしっかりと支えていくことが大切であると分かった。
- 子どもたちが主体的に活動し、好奇心を探究心につなぐためには、教師も、子どもたちとともにワクワクしながら、心を動かし一緒に探究していこうとすることが必要である。また、そのための時間の確保や教師間の連携も大切になってくる。



平成30年9月3日

保護者様

鈴鹿市立椿幼稚園

絵本貸し出しの変更について

5月より週1回1冊の絵本貸し出しを行ってきました。週末になると「今日は〇〇の絵本を借りたい」「先生によんでもらった本にする」と、楽しみにしている子どもたちの姿がありました。給食のあとの時間や降園活動の時間の読み聞かせ等々でも、絵本に親しみ、子どもたちは絵本が大好きです。

その一方で小学校、中学校と成長するにつれ、子どもたちの読書率は減少し、国語科の読解力の弱さが問題視されています。この現象は、鈴峰中学校区でも同様です。そこで鈴峰中学校区では、各小学校が家庭学習強化週間を設け、家庭学習・家庭読書を進めています。

当園においても、1学期に行った生活習慣チェックシートの集計の結果、家庭読書の達成率が低いことがわかりました。

そこで、2学期より園での絵本貸し出しの日数や冊数を下記のように変更することで幼児期からの家庭読書の定着をはかりたいと思います。まだ、字が読めない子もいますし、ひとりで読めても字を追っているだけの子がほとんどです。ですから、保護者の方の存在が大切になってきます。

日々、お忙しいとは存じますが、家庭読書の定着と将来の学力アップにむけ、一日1回、ご家庭での絵本読み聞かせに、ご理解とご協力をよろしくお願い致します。



貸出日 月・水・金 各1冊

返却日 次の貸出日に返却

返却につきましては、登園かお迎えの時間に、保護者の方が持参ください。

※ 貸し出しについては、今まで同様に、保育時間内で行います。

※ 絵本には様々な分類があります。今もお子様の興味関心を知っていただくこともできるかと思います。図鑑等を借りた場合も一緒に見ながら、楽しんでください。

※ 絵本の数に限りもありますので、読み聞かせ等ができなかったときも、必ず返却日には一度、園に戻してください。

【研究テーマ】

命の大切さと生活習慣と接続期の課題

【実践の仮説】

津市立巽ヶ丘幼稚園の4月当初の5歳児クラス（子ども）の姿として、自分で判断して行動することが苦手で、教師に確認をしてから行動することが多く見受けられた。また、園生活で友達と一緒に遊ぶなどして関わる中で、トラブルを体験しているが、困ると教師のところへ訴えに来る姿が多く、自分の思いや考えはもっているが、自分たち同士で話し合っ解決しようとしたり、周りの人に言葉で伝えようとしたりする姿が少ないことを感じた。

また、「命の大切さ」の認識は個人差が大きく、子どもが主体的に命（昆虫、植物など）と関わる実体験は環境を通して豊富であるが、「命の大切さ」に気付いたり、考えたりする機会は教師が意図的につくっていく必要があると感じている。

生活習慣については、3歳児の頃からの日々の保健指導や生活習慣チェックシート等の取り組みを通して、保護者の理解もあり、ある程度身に付いていると思われる。

そこで、育みたい子どもの姿として、

「友達や教師との人間関係の中で、命と関わる様々な実体験や命の大切さに気付いたり、考えたりする機会を通して、自分の思いや考えを出し合ったり、話し合ったりすることで、自分なりの考えを持って、周囲に発信していく姿」

とした。

取り組むにあたり、まず5歳児のこれまでの育ちについて振り返ると、子どもたちは3・4歳児の時から動植物に興味関心が高く、それらと関わる経験をしてきた。その特徴的な姿として

<3歳児>

- ・目の前の小さな生き物に興味をもち、自分本位で触る（力加減がわからない。丸まったダンゴムシを無理やり開けようとする）などして死なせてしまう。
- ・たくさん集めることが楽しく、空き容器などにいっぱい入れる。関心がなくなると、そのまま放置する。
- ・小さな生き物に触れる経験の中で、動かなくなるなど様子が変わってしまうことから「死ぬ」ということを感じ取り始める。また教師などから「可哀想ね」など繰り返し声を掛けられても、実感することがまだまだ難しく、自分の興味本位で関わることが多い。

< 4 歳児 >

- ・ 3 歳児での経験から、生き物が死ぬことを知っている為、「死んじゃった」と自分が関わったことで死んだことを少しずつ認識できる。
- ・ 周りの大人から、生き物を乱暴に扱うことを止める言葉（例えば「かわいそうでしょ」「逃がしてあげなさい」など）を繰り返し聞くことで、生き物を大切にしなければということを知るが、その感覚が身に付くというよりは、「叱られるからやめておこう」と行動を抑制するようになる。

このような 3・4 歳児での動植物との関わりの経験の積み重ねがあることを、教師が十分理解したうえで、今回 5 歳児の発達を捉え指導していくことが大切だと考えた。

以上のことから、5 歳児として育みたい子どもの姿を達成するためには、

< 活動として >

子どもたちが日々の園生活において、生き物と関わる中で、気付きや疑問をもち、それを自分なりに考えたり、友達の話に耳を傾けたり、相手の思いを取り入れたりしながら考えを深められるような活動が大切と考えた。

< 具体的な指導・援助として >

- ・ 子どもが興味・関心をもち、自分から関わろうとするような環境を設定する。
- ・ 十分に話し合える時間、場所を確保する。
- ・ 教師が子どもの姿を見ながら、「この場面で子どもに考えてほしい」と思った場面でねらいを持って関わり、子どもが立ち止まり、自主的に考えられるように投げかける。
- ・ 子どもが自分の思いが出しやすい（話し合いやすい）雰囲気を作る。
- ・ 教師は、一人一人の子どもの考えを引き出したり、つぶやきをひろったり、わかりやすく整理したりする。
- ・ 子どもが以前に経験したことが、どのように今の姿とつながっているか、見通しも含めて振り返りながら援助をする。

以上の活動、指導・援助を通して、育みたい子どもの姿を達成できると考えた。

また、生活習慣については、保健指導などこれまでの園生活の中での取り組みとともに、県的生活習慣チェックシートを活用し、それぞれ実施後に結果を分析し、特に気になる項目についてどのような力をつけていきたいか考え、子どもへの保健指導や保護者への啓発活動を行いながら実施していくことで、意識が高まっていくとよいと考えた。

【子どもの様子】実践Ⅰ（6～7月）

実践Ⅰー① 6月12日（火） だんご虫捕まえた！

外で遊んでいたA、B、Cが、「だんご虫を見つけたから、入れ物を取りに来たの！」と言いながら保育室に戻ってきた。子どもたちは保育室にあるプリンカップをそれぞれ手にして、再び外へと走り出した。教師も後を追って様子を見に行くと、カップの中にはだんご虫が数十匹ずつひしめきあうように入っていた。A「めっちゃ捕まえたやろ～」と満足そうにプリンカップを教師の前に差し出す。教師が「うわ～！たくさん捕まえたね」と、声をかけていると、Cが、「あっ、お片づけの時間や！」と気付いた。捕まえることに満足した3人は、靴を履き替え、靴箱の上にそのカップをそのまま置いた。

これまでも教師が「このだんご虫たちどうするの？」と声をかけたりしていたが、「連れて帰る」などの返事はあるものの、数日放置してあることもあり、中でだんご虫が死んでいてもあまり気に留めない様子が気になっていた。そこで教師から、「だんご虫たちカップの中ではぎゅうぎゅう詰めで苦しうさだね…。ほら、こんなに大きなお家もあるよ」と、大きめの飼育ケースがあることを知らせると、B「それ広くていいな～」A「みんなのをこの中に入れよう！」C「だんご虫の新しいお家やな」と言いながら、空の飼育ケースにそれぞれのカップに入っていただんご虫をぶつちやけて入れ、そのまま靴箱の上に置いた。



教師は、親しみや興味をもつ機会が必要であると捉え、その後のクラス全体での活動の中で、3人が楽しんでいる遊びを紹介することを通して、だんご虫の飼育の仕方が載っている図鑑を紹介することにした。

その後、テラスに飼育ケースを置く机を設定して靴箱の上から移動させ、その机に図鑑も一緒に置いて子どもたちが手に取りやすい環境を整えた。

午後からの遊びの時間には、A、B、Cを中心にたくさんの友達が集まって、自分たちで飼育ケースと図鑑を園庭に持っていき、砂や石を入れたり、落ち葉を入れたりして飼育環境を整えていく姿に繋がった。

<活動への環境構成>

- ・プリンカップに入れているだんご虫を飼育ケースに入れることを提案した。
- ・子どもたちが虫などの小さな生き物に興味を持ち、捕まえた時にすぐに入れられるよう、飼育ケースをテラスに置いた。
- ・虫について調べられるように図鑑があることを知らせ、飼育ケースの近くに置いて、調べやすいようにした。

<支援・声かけのポイント、工夫>

- ・子どもたちは、身近に準備され、透明でだんご虫の姿が見やすく、逃げにくいことから、個々にプリンカップを手に取っている。また、カップを持ち歩くことで、「これが自分の捕っただんご虫」といううれしい気持ちで次々にだんご虫を入れている。
 - 子どもたちがだんご虫にとっての快適な環境について考えられるように声掛けをする。
 - 図鑑で調べることができることを知らせる。
- ・**A**、**B**、**C**の活動に、クラスの子どもたちも興味が持てるようにしたい。
 - 全体活動の時間を活用し、クラス全体に**A**、**B**、**C**が飼育ケースにだんご虫を入れ、過ごしやすいように整えていた様子を知らせる。

実践Ⅰ-② 6月13日(水) 翌日、だんご虫の世話をする姿から

Cがコンクリートのかけらを手に登園し、「石よりコンクリートが好きって図鑑に載ってたんさな！コンクリートも食べられるし」と飼育ケースに入れたり、**B**が餌となるキャベツを持参したりする姿などが見られた。飼育ケースの前に自然と子どもたちが集まることが多くなった。

図鑑を通して、湿った環境が好きだと気付いた**A**、**B**、**C**は、飼育ケースを水道の蛇口の所へ運んで水を入れようとしたため、教師が慌てて、「湿ってるのは好きだと思うけど、それでは溺れて死んでしまいそうだね…」と声をかけ、霧吹きに水を入れてかける姿を見せた。様子を見ていた**D**が、「僕もしたい！」と水をかけ、**A**がその様子を見ながら、「もうそれぐらいでいいんじゃない？」と伝えたり、これまであまり積極的ではなかった**E**が、毎日継続して水やりをしたりする姿が見られ、**B**が「忘れやんとしてくれてありがとう」と伝える姿も見られた。



また、数人が集まってだんご虫をテラスに出して歩かせ、「お散歩」と言いながら遊んでいた姿に、教師は、「踏まれそうだけど大丈夫かな？」と声をかけると、**A**はすぐさま製作コーナーの廃材置き場から空き箱を持ってきて、「これの中ならいいんじゃない？」と友達に伝え、だんご虫を引越しさせていった。教師は、「それは、いい考えだね。だんご虫も安心して遊べるね」と声をかけた。

この箱を『だんご虫の遊び部屋』と称して、いつも飼育ケースの横に置いて、いつでも遊べるようにと考えていく子どもたちだった。そこへ、製作が好きな子どもが、「だんご虫が

遊べるすべり台があると楽しいんじゃない？」と言うと、別の子どもも「トンネルも通っていけるかな〜？」と、廃材で遊具を作って遊び部屋の中に入れ、だんご虫に触れて楽しむ姿が見られた。

また、小さい組の子どもも興味をもって一緒になって遊ぶことが増えるが、触りすぎて弱ってしまうだんご虫を見て、年長組が片付けの時間になると、**A**、**B**、**C**は何やら相談して紙に

“ぜったいにさわらないで”という文字と、小さい子にも分かりやすいようにバツ印を書いて表示していく姿が見られた。教師は「それだったら、小さい組さんも分かりやすいね」と言った。

<活動への環境の構成>

- ・子どもたちが思いつきそうな飼育に必要なもの（霧吹きなど）を事前に準備しておいた。子どもたちが生き物にとって快適な環境について考えると共に、すぐに活動できるように環境を整えた。

<支援・声掛けのポイント、工夫>

- ・**A**が飼育ケースに直接水道から水を入れようとする。
→ 教師が「死」に直結することであることを知らせる。
- ・**A**が友達と相談して、小さい組の子どもたちに「ぜったいさわらないで」と友達と相談して書こうとしている。
→ 教師は、子どもたちが自分で考えたことを、周りにどうにかして知らせようとしている姿を認める。

実践Ⅰ-③ 6月22日（金） 「そんなんしたら、かわいそうやん」

昼食を終え、絵本コーナーのゴザの近くで小さいアリを見つけた子どもたち。**B**「アリがおる！」**C**「どれどれ、ほんとや」**E**「なんでこんな所におるんやろ？」と気付いて会話が弾み始めた。教師は様子を見守っていた。すると、近くで昼食後の掃除をしていた当番の**F**も気付いて、ゴミをちりとりに急いで集めながら、「ちょっとまって！ゴミ捨てたら、これでアリを外へ逃がしてあげるから！」と言う。すると、それを聞いていたか、いなかったかは分からないが、**A**が近くに置いてあったレゴブロックを持ってアリの所へ行く。すると、**A**の行動を見ていた**F**が「あっ、そんなんしたらあかん！」と言う。その友達の声を聞きながら、**A**は笑ってアリをつぶしてしまう。**B**「あ〜あ、動かんようになった」**C**「えっ、死んだん？」とアリの様子を覗き込む。**F**が「そんなんしたら、かわいそうやん！」と怒って**A**に言う。すると、**A**は、笑いながら死骸をその辺にポイッとした。

まだこの騒動に気付いていなかった周りの友達にも聞こえるように、教師は「えっ！！**A**くん、今何したの？」と尋ねた。ごまかそうとする**A**だったが、見ていた子たちが口々に、「**A**くん、アリつぶした！」と言う。

丁度この日に避難訓練をしており、自分の“命を守るため”について話したばかりだった。

教師は「どんなに小さいアリでも、だんご虫でも、おたまじゃくしでも、それと、大きなゾウでも、命はたったひとつしかないの。死んじゃったら、もう生き返らないの。みんなも家族や友達に会えなくなったら寂しいよね？（子どもたち頷く）アリだって同じだと思うの」と話していると、**A**の表情がくもっていき、涙も見られた。

すると、**B**から「埋めてあげると天国にいけるんやって」という言葉が出た。それを聞いた子どもも、「お花もあげるといいみたい。前に友達に教えてもらってそうしたことがある」と4月に自分が友達から教えてもらった出来事を振り返って話す姿が見られた。そして**A**に「埋めてきてあげたら？」と、埋めにいくよう促す。日頃、みんなに言われると意固地になってしまい、なかなか素直に受け入れられない**A**だが、この時は埋めに行く姿となった。教師は、この経験が**A**にとって心に留まるようにと願い、「安心して天国に行けるね」と**A**の姿を大切に受け止めた。

<支援・声掛けのポイント、工夫>

・**A**が友達の反応を見たいからなのか、またはアリが保育室内にすることがいけないと感じたからなのか、友達の声掛けにもかかわらずアリをつぶす。

→ 教師は、**A**の気持ちを知りたいと思うとともに、**A**や周りの子どもたちに改めて考えさせたいと考え、声をかける。

→ 教師は、避難訓練など**A**や子どもたちが経験した他の活動と結び付けて話をし、**A**が自分のしたことにもう一度目を向け、振り返ることができるようにする。

実践Ⅰ-④ 6月25日（月） 降園後 死んでいたてんとう虫と出会う

降園後園庭で遊んでいた**A**が、死んだてんとう虫を葉っぱに乗せて教師の所へ来た。**A**は、「僕が踏んだんじゃないけど、死んでてかわいそうだから、埋めて天国へ送ってあげるわ」と言う。教師は、「優しい気持ち、嬉しいと思うよ」と伝え、タイヤの下へ埋めに行く姿が見られた。

<支援・声掛けのポイント、工夫>

・自分から死んだテントウムシに対して「かわいそう」と思える姿が見られた。

→ 小さな生き物に対する、**A**の気持ちの成長が感じられたので、教師は**A**の姿を認める。

実践Ⅰ-⑤ 6月26日（火） 虫への愛着

前日の降園後に一緒に遊んでいた**A**と**C**が、家の近くで見つけたタマムシの幼虫を虫かごに入れて、翌朝それぞれが持って登園した。2人は幼稚園に持ってくることを約束していたので、うれしそうに虫かごを2段に重ねて置いた。**A**と**C**は、「虫の2階建ての家になった～」と顔を見合わせて喜ぶ。

教師が「これ、何の幼虫なん？」と聞くと、2人は図鑑で見たことがあるようで、声を揃えて「タマムシ！」と言った。**A**の母親が、「この虫はストレスに弱いで、触ったり揺すつ

たりするとすぐに弱るから、見るだけやで！」と言った。Aは虫を見に来る友達に、「この幼虫はカゴトントンしたりせんと、見るだけにしてな。弱っちゃうからさ」と優しく伝えた。

その後、みんなが虫に興味をもち、家から持参したカミキリムシなどが入った虫かごが飼育机にたくさん並ぶようになり、友達と一緒に観察していく姿が増えた。

<活動への環境の構成>

- ・子どもたちが「友達に見せたい」と家庭から持ってきた虫かごを、みんなが見られるように、虫かごを置く机をテラスに準備した。

<支援・声掛けのポイント、工夫>

- ・家から持ってきたタマムシの幼虫を、自分が大切に扱おうとすることはもちろんのこと、自分が母親から聞いたことを必要と感じて、友達にも伝えようとしている。
→ 自分の思いを友達に伝えようとする姿を、教師は十分に受け止め、自信につなげるようにする。

実践Ⅰ-⑥ 7月5日(木) 「クワちゃん、疲れたみたい」

数日前から空き箱をバトル場に見立てて、戦わせることを楽しむ姿が見られていた。この日は、AとBが登園時に持参したクワガタムシでバトルをすることを楽しむ。しばらく戦いをさせたあと、B「ちょっとクワちゃん疲れたと思うから、休憩させたらなかわいそうやな」と言うと、いつもは楽しいことから気持ちが切り替わりにくいAも「そうやな、また後でやろう！」と、あっさりとクワガタムシを虫かごへと戻し、積み木遊びへと移っていった。教師はAが友達の思いを受け入れ、「まだ遊び続けたい」という自分の気持ちを切り替えた様子から、Aの成長を感じた。



<支援・声掛けのポイント、工夫>

- ・戦わせて遊ぶ中で、Aが友達の言葉によって、虫の疲れに気付き、受け入れることができた。
→ 教師は、Aの自分の気持ちを切り替える姿を成長ととらえ、見守った。

実践Ⅰ-⑦ 7月6日(金) だんご虫逃がしたる

Aが「先生、もうすぐ夏休みやし、だんご虫逃がしたる？」と聞きに来たので、教師が「それ、いい考えだね」と伝えた。それを聞いていたDが、「うんうん、逃がしたらな、ずっとお母さんやお父さんに会えやんくて、かわいそうやもんな」とつぶやく。集まってきた子どもたちに、教師が「みんなでお世話してきたから、みんなで相談したらどうかな？」と伝えると、周りで聞いていた子どもたちも口々に「もう逃がしたる〜！」と言った。教師は続けて、「じゃ、どこに逃がしたらいいと思う？」と投げかけた。

子どもたちが集まって、**G**「土の所やな！」**A**「踏まれるとあかんで、端っこがいいな！」などと話し合う。その中で、虫が大好きな**C**が、「捕まえた所がいいんじゃない？だって、そこが好きやったからおったと思うし」と虫のことを考えながら言うと、**B**も、「あ～そうやな。それがいいな！」と共感した。大きな重い飼育ケースをみんなで囲むように力を合わせて持ち合い、園庭の逃がす場所まで来ると、一旦飼育ケースを置いた。**G**は“どうやって逃がしたらいいのかな？”というような戸惑う姿が見られたが、**B**が近くでケースから一匹ずつ捕まえては、「ばいば～い！」と逃がしてあげている姿を見て、同じように逃がしていく姿が見られた。また、だんご虫一匹一匹に、「ありがとう」と言いながら逃がす**H**の言葉を聞いて、教師が「どうしてありがとうなの？」とたずねると、**H**は「今まで一緒に遊んでくれたから」と答えた。

<支援・声掛けのポイント、工夫>

- ・今まで、飼育していたダンゴ虫を大切に逃がしてあげようとする**A**の姿が見られた。
 - 教師はその気持ちを今後も大事にしてほしいことを**A**に伝える。**A**自身が少しずつ変わってきたことを認めることで、**A**が「自分の考えを相手に伝えてよかった」と感じられるように援助した。
 - 友達との関わりが増えてきており、教師が直接的なことを言うのではなく、みんなで考えるように投げかけた。また、**A**のすぐに行動に移せるというよいところを生かせると考え、声かけを行った。

その他の実践から（実践Ⅰ後の取組）

【1. ねらいと内容】

○園生活の中で、子どもたちが大好きな小さな生き物と接する実体験をさらに積み重ねる中で、生き物に対して不思議に感じたり、友達と一緒に「こうしてみよう」と試したり考えたりする活動を通して、生き物に対する温かな感情が芽生え、生命を大切にしようとする心が少しずつ育つようにした。

○クラスみんなで育てる夏野菜に水遣りを行う時、当番活動を取り入れることで、クラスの皆と一緒に育てたから大切にしなければという気持ちを育みたいと考えた。また、当番の子どもは、クラス全体の活動時に、いくつ野菜が収穫できたとか、どのように生長しているかなど自分が気付いたことを、みんなの前で話す機会をもった。



○子どもたちの発達に合わせて図鑑・絵本等の視覚教材を活用した。本の内容を実体験と結び付けたり、想像を膨らませたりして遊びや活動に生かすことなどを通して、命の大切さについて考えるきっかけとした。

○子どもたちが自分自身の成長を感じたり、友達のことを大事にしたりする気持ちが育めるように、毎月誕生会を行った。特に5歳児では、誕生会の少し前から、その誕生月の子どもへのプレゼントを入れる袋を保育室に置いておき、クラスの子どもたちが自分で作った折り紙や手紙などのプレゼントを準備する取組を取り入れた。



【2. 活動への環境の構成】

○植物の生長や変化に長期的に興味・関心を持てるように、幼児たちにとって身近でいつでも世話することができる園庭に畑を作って夏野菜を育てた。

6月下旬には、自分たちで育ててきたピーマンやなすが大きくなっていることなど、気が付いたことを友達と知らせ合う姿が見られるようになり、収穫時には「なんかこれ、いい匂いがする！」と野菜の匂いを嗅いだりして収穫を経験した。



また、育てている種類の野菜表を用意し、いくつ収穫できたかをわかりやすく感じられるようにし、数・量に触れたり、収穫の喜びを味わえたりするようにした。

また、育てている種類の野菜表を用意し、いくつ収穫できたかをわかりやすく感じられるようにし、数・量に触れたり、収穫の喜びを味わえたりするようにした。



○豊かな経験をさせたいと考え、地域の環境を活用し、久居農林高校の生徒と一緒に年間を通してさつまいもを育てるなどの取組を行った。

近郊の久居農林高校に行き、高校生と一緒にさつまいもの苗を植え、生長を見守り、芋ほりを行った。高校生のお兄さん、お姉さんに手順を教えてもらったり、苗植えや芋ほりをした楽しい気持ちを共感してもらったりすることで、命のあるものに対してより親しみを感じることができた。

<5月24日(木) さつまいものつるさし交流>

植物コースの生徒と交流する。

4・5歳児が農林高校まで行き、高校生とペアで農林高校の畑にてつるさしを行なう。つるさしの後は水やりをしたり、畑の近くを散歩したり、遊んだりして楽しく過ごした。



<6月1日(金) 田植え>

食品コースの生徒と交流する。

5歳児のみで農林高校まで行き、高校生とペアになって、一緒に田んぼまで歩いて行き、稲の苗を植える。



<10月4日(木) 稲刈り(雨で中止)>

<11月1日(木) 芋ほり交流>

4・5歳児で農林高校まで行き、つるさしの時のペアで芋ほりを行う。

その後、芋のつるでリースを作ってもらったり、焼き芋を食べたりした。どんぐりや木の実の袋詰めのお土産をいただいたので、芋のつるを乾燥させてから、園児がクリスマスリース作りを行った。



<1月30日(金) スイートポテト作り交流>

4・5歳児で農林高校へ行き、つるさしの時のペアでスイートポテトを一緒に作って食べた。

高校生が予め作ってくれた生地を使い、園児が思い思いに形を作った。焼いている間は、大型絵本を読んでもらったり、触れ合って遊んだりしてもらった姿が見られた。その後出来上がったスイートポテトを一緒に食べた。

このクラスの生徒との交流が最後となることから、感謝の気持ちを込めて、園児が作っておいたプレゼント(プラ板の飾り)をペアのお兄さんお姉さんに渡した。



【3. 支援・声掛けのポイント、工夫】

- 子どもたちは、小さな生き物と関わる経験を通して様々な発見、気づきをしている。子どもたち一人一人が自分の気づきを、言葉や表情、文字などで表現している姿を、教師は丁寧に受け止めるようにしてきた。

また5歳児のこの時期、周りの友達の思いに触れることで共感したり、改めて自分の思いや考えを確認したり、深めたりする力をつけてほしいと思い、一人一人の気づきを周りの友達へ知らせるきっかけづくりを丁寧に行った。

- 生き物と接するとき、子どもたちが興味関心に合わせて「どうしたらいいのか」と疑問に思う場面がたくさんある。その時に、子どもたち同士が自分の思いを出して、解決しようとする姿を大切にしてきた。教師は子どもたちが自分の気持ちを出しやすい雰囲気を大事にしたり、思いを分かりやすく整理して伝えたりするなどの援助を行ってきた。

- 久居農林高校との交流活動では、園児、高校生いずれにとっても有意義な活動になるように、交流活動を年間計画に位置付けた。活動の事前の打ち合わせなどで、ねらいや活動内容について職員間で検討した。また、前回の反省を生かして次回の活動の見直しを行うことで、子どもたちにとってより活動しやすい環境・支援について考えた。

【子どもの様子 実践Ⅱ】(10月～12月)

実践Ⅱ-① 10月11日(木) 絵本の読み聞かせを通して命の大切さを考える

(9月18日(火)に、カマキリを飼うために、餌としてコオロギを入れ、カマキリがコオロギを捕食する姿を見た。カマキリの立場に立って食べることの大切さ、コオロギの立場に立って食べられることの悲しさについて考えた後)



オオカマキリを持参して登園したHが「このカマキリ、目が片方は白で、片方は黒なんさ！」と友達に知らせていき、周囲にいた子どもたちが観察をした。B「このカマキリはメスやな」教師「何でわかるの？」B「お尻がちょんがってるのがメスで、3本『シュッ』ってなっているのがオスなんさ」H「カマキリってミミズも食べるんやって」と会話を楽しんでいると、Aが来て、「カマキリは餌やらなあかんで逃がしたり」と言った。Aの言葉は、前回の体験(9月18日)を通しての言葉であると教師は感じた。

そこで教師は、観察の為の捕獲の意味を伝えたいと思い、「でも、こうやって捕まえて観察するから、カマキリのことがよくわかるんだよね」A「でもかわいそうやん」。教師は「そっか。Aくんの優しい気持ちだね」とAの思いを受け止めた。そのすぐ後の全体活動の時に、カマキリの餌の出来事の話をしてから、(前にバッタが餌になる様子を見て「かわいそう」と言っていた子どもたちに、機会があったら話そうと思って準備していた)『いのちをいただく～みいちゃんがお肉になる日～』という本を読むことにした。内容は難しいので、少し簡単にしながら読み進めた。

今後、『いのち』と向き合う時に、少しでも心の片隅に経験として積み重なっていけばと願っている。

※『いのちをいただく～みいちゃんがお肉になる日～』の内容

女の子が、自分の祖父が大切に育ててきた牛の「みいちゃん」が食肉となることに会う物語。命をいただくことについて、考える機会となる内容。

実践Ⅱ-② 12月14日（金） 絵本を通して自分の成長を振り返る

毎月行っている誕生会の日に、6歳の誕生日を迎える主人公の『僕』が赤ちゃんから6歳になるまでの成長の様子を、父親から教えてもらう絵本『ぼくがあかちゃんだったとき』の読み聞かせをした。



主人公が赤ちゃんの時には、歯が1本もなくお母さんのおっぱいやミルクを飲ませてもらう場面や、オムツを替えてもらう場面では、子どもたちが、赤ちゃんの頃は自分で何もできずに周りの人に大切に育ててもらったことを感じられるよう、教師はゆつたりと読み進めた。

話が進む中で子どもたちは、自分たちと同じ年の主人公と自分とを重ね合わせているようで、「ふーん」「そうやな」と友達と顔を見合わせて楽しむ姿や、主人公の小さい時の様子と、現在の自分たちの弟や妹の姿に重ね合わせて笑う姿が見られた。

絵本を読み終え、自分の成長を振り返る機会になればと思い、教師は「またお家で、自分たちが赤ちゃんだった時のことをぜひ聞いてみてね」と話した。子どもたちは嬉しそうに「うん、わかった」と口々に応えた。

実践Ⅱ-③ 12月17日（月） 「僕も！私も！」

週末の休みを挟み、**A**は朝の身支度を終わると自分から教師のところへ来て、「先生、お母さん仕事やったから、お婆ちゃんに聞いたんやけどな…」と話し始めた。教師は**A**が自分から話したいという思いで声をかけてくれた姿を嬉しく思い、「どうだった？」と話に耳を傾けた。**A**は「お母さんが仕事とかでどこかに行った昼寝の時に、お婆ちゃんやと僕が全然寝やんくて困ったって。でも、近くの神社まで抱いて連れていったら僕が寝たんやってさ～」と昔の自分を振り返って照れ笑いしながら話した。

教師と**A**のやりとりを聞いていた**H**は、教師ではなく**A**に、「**A**くん、僕はな、赤ちゃんの時のビデオ見たよ！お風呂入っている時に、こ～んな顔して気持ち良さそうやったわ」と、目をつむってほんわかした顔真似をしたので、**A**と教師は思わず笑った。

この時の**H**の話を楽しそうにうなずきながら聞く**A**の姿から、**A**は**H**が自分の話を受け止めてくれたうれしさや、**H**のこれからする話に興味を持っているのではないかと思い、教師は**A**の成長を感じた。

すると近くに居た**G**も、自分の話を聞いて欲しい思いから大きめの声で、「僕はお婆ちゃんやと泣かんけど、お爺ちゃんに抱っこされると泣いたんやって！」と言った。教師も、「そんな時、あるある」や、「先生の子どもが赤ちゃんの時もそうやったよ～」などと話したり、頷いたりして、子どもたちと一緒に会話を楽しみながら、子どもたちが伝え合い、互いの思いを受け止めていく姿を認めるようにした。

その様子に周りの子どもたちも口々に、絵本の一場面を思い出しながら「絵本の子（主人公の僕）みたいに、私もティッシュいっぱい出していたずらしたって」、「私も私も！」と友達と顔を見合わせ、楽しそうに話したり、「僕もジュースやご飯もこぼしてたんで」、「そうそう、口のまわりにいっぱいつけてな〜」と笑い合ったり、「初めて注射した時、大泣きしたみたい」、「へ〜そうなんや」などと、次々に自分の赤ちゃんの頃の様子を嬉しそうに友達に伝え合ったりする姿が見られた。



子どもたちの会話を楽しむ雰囲気を楽しみにしながら、教師は「みんなは、おうちの人や先生たちにとって、大切な子どもなんだよ」「みんな大きくなったね」と声を掛けると、友達と顔を見合わせながらうれしそうな表情をみせる子どもたちの姿が見られた。

<実践Ⅱから>

○これまで園生活の中で、子どもたちにとって身近な環境の中での様々な体験を通して、虫や動物の“命”について触れたり考えたりしてきた。それらの経験の積み重ねをもとに、5歳児後半のこの時期に、物語を通して、自分（人）に置き換えて考えたり、自分や周りの人の思いを大切に受け止めたりすることができるようになってきているので、絵本の読み聞かせは「命の大切さ」について考える方法の1つとして有効であると思う。

○①では実際にコオロギを食べるカマキリを見たことで驚きや寂しい感情を持った子どもたちに、補食関係について書かれた『いのちをいただく』の絵本を読むことで、いろいろな立場からの考えがあることに気付かせたいと考えた。しかし、補食関係については様々な捉え方があると思うので、「命の大切さ」について幼児期にどこまで感じさせたり、身に付けさせたりするとよいのか難しさを感じた。この読み聞かせの後、子どもたちと話し合う機会をもってもよかったのではないかなと思う。

○②では“自分（命）が周りの人に大切にされていることを感じてほしい”というねらいをもって、6歳になる男児の誕生日を家族や祖父母と一緒に祝う日に、自分の成長を振り返るという内容の絵本を読むことにした。

○③では、保護者に自分の成長の姿を聞かせてもらったことは子どもたちにとってよい機会になったと思われる。教師や友達に家庭で聞いてきたことを話す子どもたちの姿から、子どもたちは家庭で自分の話を聞いた時の保護者の話し方や、表情などから「自分は大切にされていた」と感じたのではないだろうか。そのような体験があったからこそ、幼稚園で自分の思いを話したい、知ってほしいという気持ちになったのではないだろうか。

この日に友達の話聞いて、「自分も、自分のことを知りたい」という思いから、友達と同じように保護者の方に話を聞いてきて、翌日友達に話す姿も見られた。自分の話も友達に聞いてほしいという気持ちが持てる姿に成長が感じられた。

○以前は、教師が子どもたちの間に入ることで、友達と話を進めていた子どもたちが、今回の実践では、「自分の思いを友達に伝えたい」という意欲的な姿や、友達の思いを受け止め、共感していく姿が増え、成長が感じられた。その時々の子どもの発達に合った活動だからこそ、子どもが心を動かし、このような活発に伝え合う姿が出てきたのではないかと思う。

【生活習慣の向上に向けた取組とその成果】

1. 第1回 生活習慣チェックシート実施

実施日	6月19日（火）～6月29日（金）
結果分析	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3、4、5歳児とも、「あさごはんをたべる」の項目はしっかり守れている。 ・ 3歳児は、「早寝早起き」など、ほぼ規則正しい生活ができている。年齢が低いほど、親の意識が高い。（チェックシートに初めて取り組んだこともあるかもしれない） ・ 3歳児は排泄（大便）の習慣がまだ身に付いていない。おむつをしている子どももいる。 ・ ゲームを見る時間は2～3時間が多いが、ほとんど守れていない。 ・ ゲーム、テレビを見る時間を守れていない人は、家の人と一緒に、本をあまり読んでもらっていない。 ・ 4、5歳児は、絵本を自分で読めるようになってきているからか、3歳児よりも読んでもらう時間が少ない。 ・ 5歳児になると、あいさつ、着替えなど自分でしようという意識ができてくる。4歳児ではできなかったことが、5歳児ではほとんどできるようになる。 ・ 5歳児になると、「自分でしよう」という気持ちが出てくる反面、年齢が大きくなるほど、生活習慣が崩れていく傾向も多く見られる。 ・ 朝起きるのが遅いと、登園時間が遅い。朝ごはんを食べていない子どももいる。寝る時間が遅いと、起きる時間も遅くなり、園に来て動き出しにくい姿が見られる。
結果からの課題設定	<p><今回取り上げた課題></p> <p>早寝早起きができない子どもは、あくびをしていることが多く、集中して遊べないことがある。</p> <p><啓発について></p> <p>早寝早起きについては、保護者の意向が大きいため、子どもたちと保護者に対して早寝早起きの大切さを伝えていきたい。</p>

<p>子どもたちへの啓発</p>	<p>9月6日（木）9月の保健指導で早寝早起きについて指導を行う。</p> <p>① 一人ずつ身長と体重を測りながら、前回とどれだけ差があるかを伝える → 自分の成長に対する喜びや、しっかり食べようという気持ちに繋げる</p> <p>② 時絵のように朝起きるところから夜寝るまでの1日の活動を、分かりやすく絵で示しながら話を進める。 → 夏休みが明けて生活習慣の見直しをすることを通して、早寝・早起きの大切さを分かりやすく伝える。</p> <p>③ その後保育室に戻り、担任からも、翌日から取り組みが始まる『生活習慣チェックシート』について話をする。 → 子どもたちが自分から意識できるように、「朝は7時までに起きる」「夜は9時までに寝る」と、具体的に時間を示した。</p>  
<p>保護者への啓発</p>	<p>早寝早起きについて、保護者が設定する時間(子どもが寝る時間、起きる時間)自体が遅い傾向があった為、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏休み前のクラス通信で「9時までには寝て、7時には起きるとよい」ことを具体的に知らせた。 ・第2回（9月）生活習慣チェックシートを実施する際に、第1回目の結果分析を保護者に通信で知らせ、早寝早起きについても啓発を行った。

2. 第2回 生活習慣チェックシート実施

実施日	9月7日（金）～9月20日（木）																								
結果分析	<p>・「起きる時間」「寝る時間」については、第1回目は「起きる時間」は5時30分～8時、「寝る時間」は、6時30分～10時45分と、大変幅が広がったが、第2回目には、「起きる時間」が6時～8時、「寝る時間」は8時～10時となり、どの年齢も「起きる時間」は7時、「寝る時間」は9時が圧倒的に多くなった。少しずつ生活習慣が確立されてきているようである。</p> <p><5歳児></p> <div data-bbox="632 667 1262 1025" data-label="Figure"> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>6時00分</th> <th>6時30分</th> <th>7時00分</th> <th>7時30分</th> <th>8時00分</th> <th>8時30分</th> <th>7時30分</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>第1回</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>11</td> <td>5</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>0</td> <td>4</td> <td>13</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table> </div> <p>・「朝ごはんを食べる」の項目においては、どの年齢も、朝ごはんを食べずに登園する子どもが数人見られた。朝ごはんを食べることで、脳が活性化され、物事に取り組むすべての力や考える力につながっていくので、今後保健指導等でも、朝ごはんを食べることの大切さに触れていきたい。</p> <p>・「テレビ・ゲーム」の時間については、1時間以内の設定が多くなり、「おうちの人と一緒に本を読む」の項目が以前よりも多くなってきた。1冊の本を通して、親子でふれあいを深めることで、情緒の安定にもつながり、やがては学習意欲の基盤にもつながっていくのではないかと、保護者にも伝えていきたい。</p> <p>・どの項目においても、意識的に取り組んでいただけるようになった。</p>		6時00分	6時30分	7時00分	7時30分	8時00分	8時30分	7時30分	第1回	0	3	11	5	3	0	0	第2回	0	4	13	1	1	0	0
	6時00分	6時30分	7時00分	7時30分	8時00分	8時30分	7時30分																		
第1回	0	3	11	5	3	0	0																		
第2回	0	4	13	1	1	0	0																		

<p>結果からの 課題設定</p>	<p><今回取り上げた課題></p> <p>就学前ということもあり、小学校へ進学して大きく生活リズムが変わることが予測される中、「早寝・早起き・朝ごはん」について、改めて子どもや保護者に啓発を行い、基本的な生活習慣の大切さを感じてもらおう。</p> <p><啓発について></p> <p>『早寝・早起き・朝ごはん』の紙芝居を通して、基本的な生活習慣の大切さを知らせるとともに、子どもたちが自分の生活について振り返る機会とする。また、保護者には、子どもたちへの保健指導の内容を知らせるなどし、啓発を行うこととした。</p>
<p>子どもたち への啓発</p>	<p>1月8日(木)保健指導で『早寝・早起き・朝ごはん』について指導を行う。</p> <p>① 体重測定では前回と同様に、一人ずつ測定し、どれくらい体重の増減があるかを具体的に伝える。</p> <p>② 『あさのたいようさん ありがとう』の紙芝居を読む。</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太陽が出ると『おはようスイッチ』が入る。 ・ゲームは時間を決めて遊ぶ。 ・夜遅く寝ると、朝起きられない。 ・朝ごはんを食べないと元気が出ない。 <p>→ 夜寝る時間を聞くと、8時30分～9時という子どもが多く、「お兄ちゃんやお姉ちゃんがいるから遅くなる」という子どもたちの発言を受けて、夜寝るのが遅くなると、朝が起きられなくなることや、就学を控えている年長児には、小学校の始業時間に合うように、1月頃から朝6時30分には起きられるように、早く寝て早く起きる練習していくといいことを伝える。</p> <div data-bbox="979 857 1339 1122" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1070 1111 1339 1458" data-label="Image"> </div> <p><保護者への掲示></p>
<p>保護者への 啓発</p>	<p>保護者向けにも保健指導の内容を知らせ、起きる時間や寝る時間の設定を協力していただけるよう掲示する。</p>

3. 第3回 生活習慣チェックシート実施

実施日	11月9日（金）～11月22日（木）																												
結果分析	<p>・「起きる時間」「寝る時間」については、第1回目、第2回目と比べると「起きる時間」が7時～7時30分、「寝る時間」が8時30分～9時が多くなり、生活習慣が確立されてきたのではないかと感じられた。特に5歳児は、就学に向けて意識的に取り組めるようになった成果が感じられた。4歳児は、「寝る時間」においてばらつきがあったように思う。</p> <p>・「あさごはんを食べる」の項目においては、3、4、5歳児ともほとんどが朝ごはんを食べて登園できるようになった。</p> <p>・「テレビ・ゲーム」の時間については、1時間以内の設定が多くなってきたが、2時間以内の設定も以前多い。設定時間が多いと、親子で一冊の本を通して、ふれあいを深めるという時間が取りにくかったのではないかと感じる。4・5歳児は3歳児に比べると、自分で本を読むことができるので、こういった結果につながるのかもしれない。</p> <p><5歳児></p> <div data-bbox="603 943 1316 1344" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">ゲームをみる・テレビをみるじかんをきめる</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th> <th>30分以内</th> <th>50分以内</th> <th>60分以内</th> <th>70分以内</th> <th>90分以内</th> <th>120分以内</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>第1回</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>12</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>9</td> <td>0</td> <td>4</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>10</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>4</td> </tr> </tbody> </table> </div>		30分以内	50分以内	60分以内	70分以内	90分以内	120分以内	第1回	1	0	12	0	2	4	第2回	1	0	9	0	4	2	第3回	1	1	10	0	3	4
	30分以内	50分以内	60分以内	70分以内	90分以内	120分以内																							
第1回	1	0	12	0	2	4																							
第2回	1	0	9	0	4	2																							
第3回	1	1	10	0	3	4																							

【小学校との連携方法】津市立誠之小学校との交流

1. 6月14日(木)・15日(金) 七夕交流

5年生の児童と一緒に七夕飾りを作る交流会を行なった。

交流の中で、初めて出会い、ペアになる時には固い表情が見られていたものの、製作が始まると、「上手！上手！！」、「そうそう、それでいいよ」などのお兄さん、お姉さんの優しい言葉がけに、園児の表情も次第に和らいでいく。

園児だけでは難しい笹飾りも一緒に作ることで、スムーズに作業を進めていくことができ、出来上がった時には園児の笑顔が多く見られた。飾り作りを終えると、ペアで絵本の読み聞かせをしてもらったり、ジャンケンをしたりするなど楽しいふれ合いとなった。



また、帰る時には、園児の支度を児童が自然に手伝ってくれる姿も見られた。

次の交流が7月のプール交流となり、「待っとるよ！」と児童から声をかけてもらい、嬉しそうな表情が見られた。



2. 7月4日(水) プール交流 雨の為中止 → ゲーム交流

3回目の交流となることから、双方の子どもたちが顔を覚えており、積極的に関わりあう姿が見られた。その後、園児がプールで小学校へ行った時に、「〇〇君」とうれしそうに呼び合って手を振る姿が見られた。

3. 11月13日(火) 幼小交流なかよし広場 (1年生との交流)

なかよし広場には親子で参加し、小学校の体育館へ行った。

小学校からの事前の手紙や校長先生の挨拶の中で、この会の趣旨として『1年生の児童が前に立って進行したり、説明したりするなどの実際の姿を見て、来年度の今の園児たちが就学した時の姿を想像することにつなげたり、小学校の様子を感じ取ったり、入学への思いを膨らませたりして楽しみにする姿につなげる』ということを保護者向けに伝えてもらった。

1年生の児童がしてくれる遊びのコーナーを、巽ヶ丘幼稚園5歳児を含む来年度就学予定の園児たちが楽しんだ。受付の時に一人1枚紙をもらい、体験した各コーナーでスタンプを押してもらった。コマ・けん玉・やじろべえ・お手玉・的入れ・もぐらたたき・ボウリング・輪投げ・魚釣り・射的・「箱の中身は何でしょう」のコーナーがあり、園児が好きなコーナーを選んで参加できるようになっていた。



1年生の中には巽ヶ丘幼稚園出身の児童もいて、知っている友達がいたことで、話しかけたり、喜んだりする姿が見られた。また、たくさんのコーナーが用意されており遊び方を優しく教えてもらったり、難しいことを手伝ってもらったりして楽しむ姿が見られた。

園に戻ってからも友達とスタンプ表を見せ合って、面白かったことを伝え合う姿が見られた。

4. 2月19日(火) 園児たちの授業参観(予定)

5. 3学期(予定) 教師同士の情報交換会(予定)

この時に「三重県保幼小の円滑な接続のための手引き」を持っていき、今年度の教育推進事業での取り組みについて小学校の先生に話をする予定。

【学識経験者より】

「命は大切である」ということは、大人にとってはごく当たり前の大前提です。しかし、そもそも命というものが何なのか十分に分かっていない幼児に対して、「命は大切」という言葉を繰り返し唱えたとしても、効果がないことは明らかです。重要なのは、命とかがわる実体験であり、そこでの主体的なかかわりを通じて、子どもが自ら気づき考え、そして、そのことを仲間同士で伝え合い、振り返る中でさらにその認識を確かなものにしていくことでしょう。津市立巽ヶ丘幼稚園では、そのような子どもの姿を求めて実践を行っています。

小学校への接続を考えた時、子どもの命に対する認識が就学前までにどのように育っているかを伝えることは重要です。しかし、先に述べたように、命が大切であることはあまりにも自明なことなので、小学校以降の教師は、そうした認識や態度は子どもの中に最初から当たり前のように備わっているものと思ってしまうがちです。そうではないことを知ってもらうためには、幼児期の終わりの姿だけでなく3歳からの姿も示すことが必要で、巽ヶ丘幼稚園では、3歳から5歳にかけての育ちの姿をていねいに追跡されています。

実践の中でも、当初は虫のことを「たくさん捕まえるゲーム」の目標物としか捉えていなかった子どもたちが、親しみを持ってかかわる中で次第に生活する主体として捉えるようになり、その命を守るために世話をしたり優しく接したりするようになっていきます。虫の死と向き合って悲しさややるせなさを感じたり、虫にとっての幸せを考えて逃がしてやったりするようになります。野菜の栽培やクッキングの取り組みもしながら、後期になるとカマキリによるコオロギの捕食の様子を見たり、絵本を通して赤ちゃんだった頃からの自分の成長を振り返ったりします。そうすることで、命の大切さに気づき考えるだけでなく、ものを大切にすることや、自分が周囲の人たちによって生かされていること、自分や他者を思いやり、大切にすることなども経験的に学んでいきます。

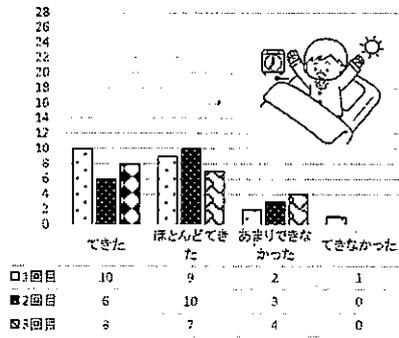
命の大切さに関する実践は、小学校以降の教育では主に道徳教育とのつながりが深いものです。子どもは成長するにしたがって社会の中にある道徳を内面化していき、それが彼らの心の中で道徳性として根付いていきます。しかし、その心の中に根付いた道徳性も、ふさわしい場面にふさわしいかたちで発揮されないと意味がありません。ものごとの善悪を判断できること（道徳判断）とそのように実践すること（道徳行為）は必ずしも一致しないとはよく言われますが、「命は大切」とただ口にするだけではなく、確かに命を大切にしたい振る舞いができるようになるためには、幼児期からの実体験を通して判断の根拠を子どもの心の中にしっかりと根付かせていくことが重要です。幼児教育から小学校教育への接続期にかかわる教師は、そのことを今一度考える必要があり、そのために巽ヶ丘幼稚園の実践成果報告は大いに役立つことでしょう。

生活習慣チェックシート結果

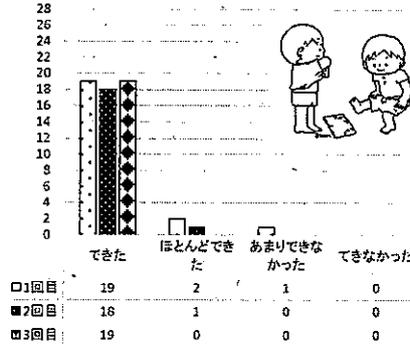
7日 「できた」
4～6日 「ほとんどできた」
1～3日 「あまりできなかった」
0日 「できなかった」

単位:人

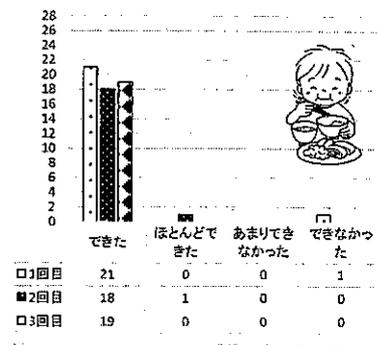
きめたじかんにおきる



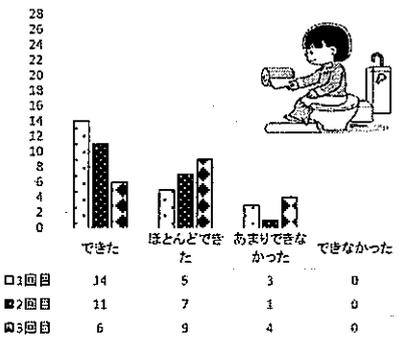
じぶんできがえをする



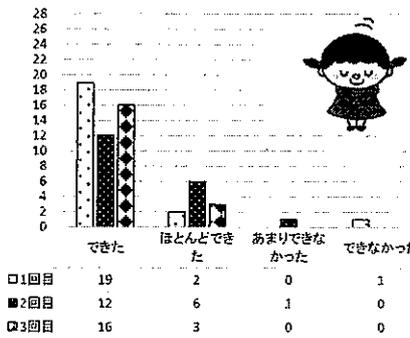
あさごはんを食べる



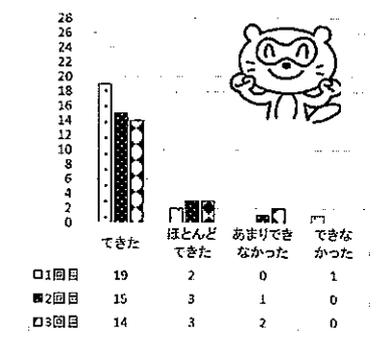
うんちをする



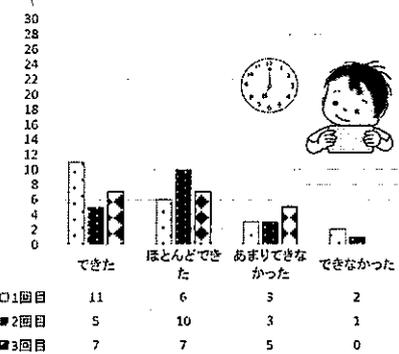
すすんであいさつをする



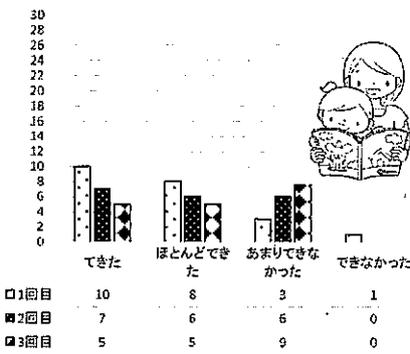
からだをうごかしてあそぶ



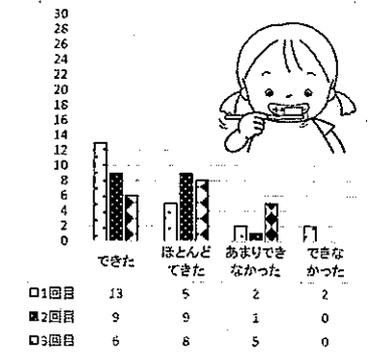
テレビをみる・ゲームをするじかきをきめる



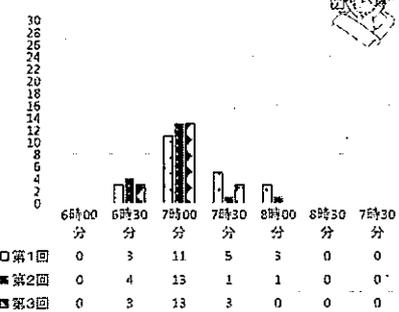
おうちのひとといっしょにほんをよむ



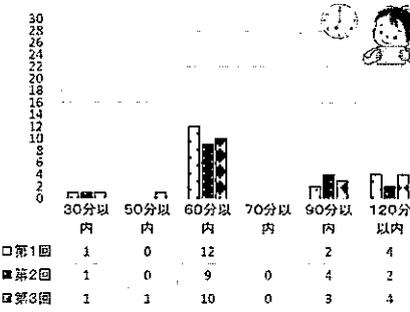
はみがきしてからきめたじかんにねる



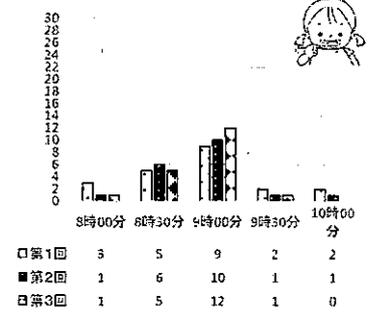
きめたじかんにおきる



ゲームをみる・テレビをみるじかきをきめる



はみがきしてきめたじかんにねる



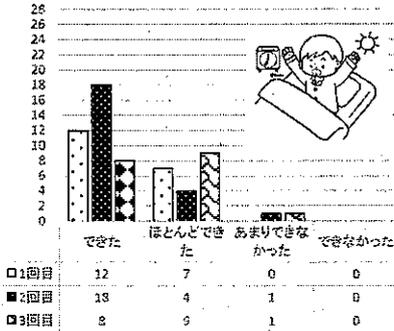
生活習慣チェックシート結果

4歳児 組

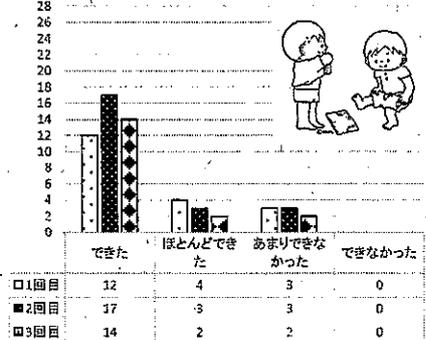
7日 「できた」
4～6日 「ほとんどできた」
1～3日 「あまりできなかった」
0日 「できなかった」

単位:人

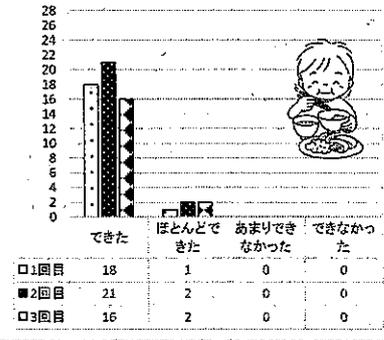
きめたじかんにおきる



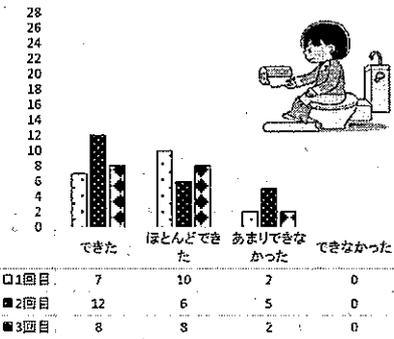
じぶんでかえをする



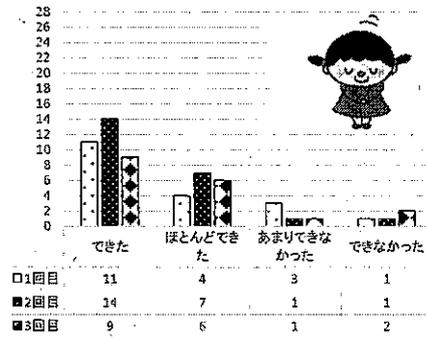
あさごはんをたべる



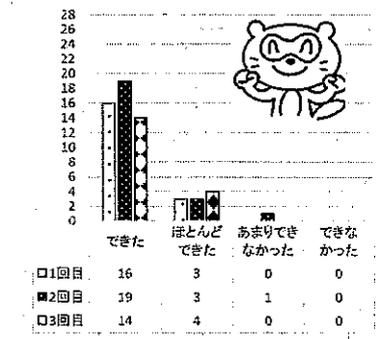
うんちをする



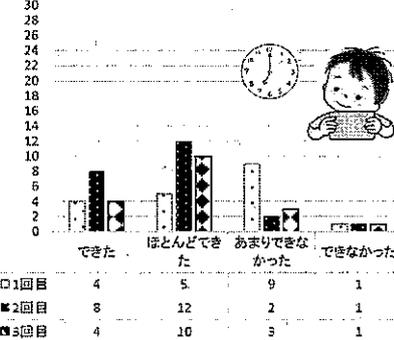
すすんであいさつをする



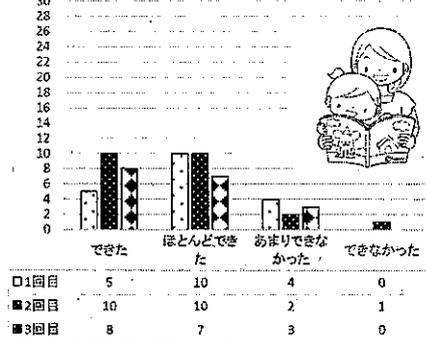
からだをうごかしてあそぶ



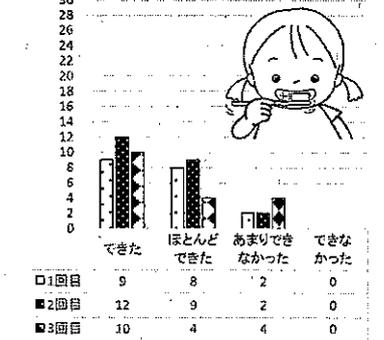
テレビをみる・げーむをするじかんをきめる



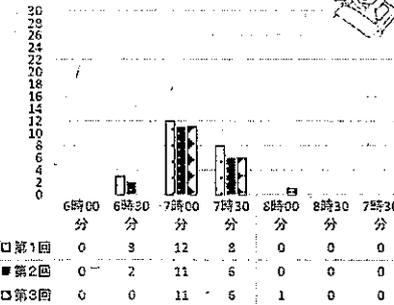
おうちのひとといっしょにほんをよむ



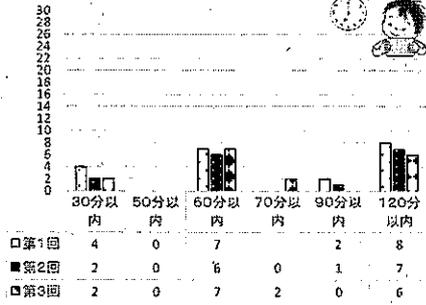
はみがきしてからきめたじかんにねる



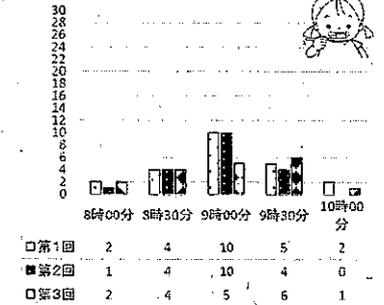
きめたじかんにおきる



ゲームをみる・テレビをみるじかんをきめる



はみがきしてからきめたじかんにねる



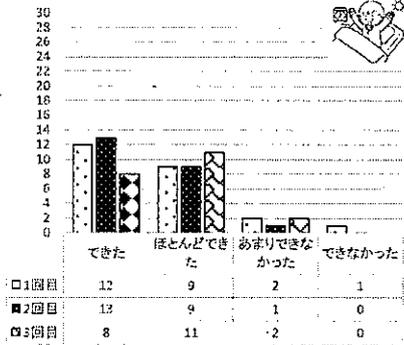
生活習慣チェックシート結果

7日 「できた」
 4~6日 「ほとんどできた」
 1~3日 「あまりできなかった」
 0日 「できなかった」

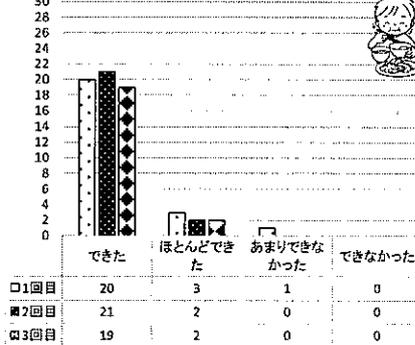
3歳児 組

単位:人

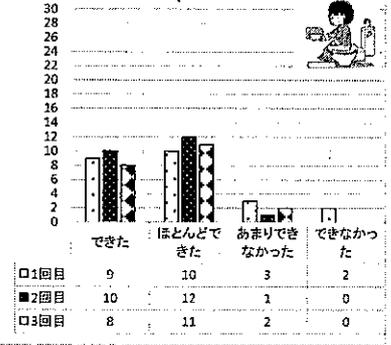
きめたじかんにおきる



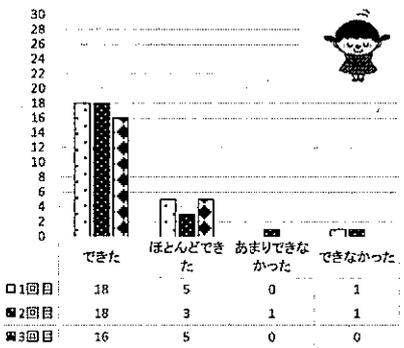
あさごはんをたべる



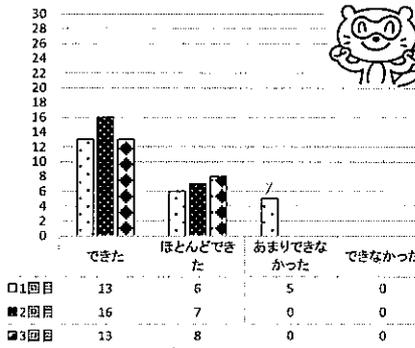
うんちをする



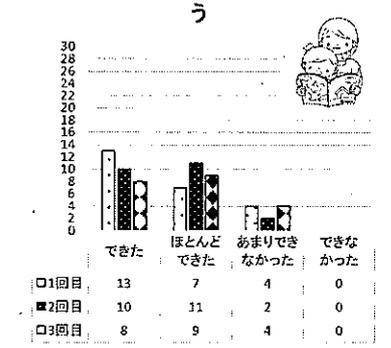
あいさつをする



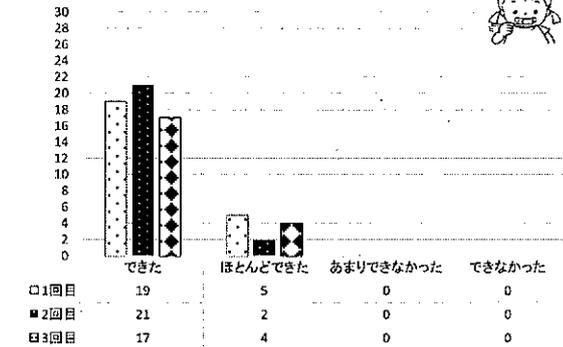
からだをうごかしてあそぶ



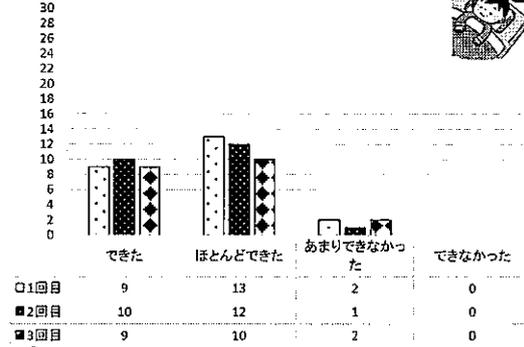
おうちのひとにほんをよんでもらう



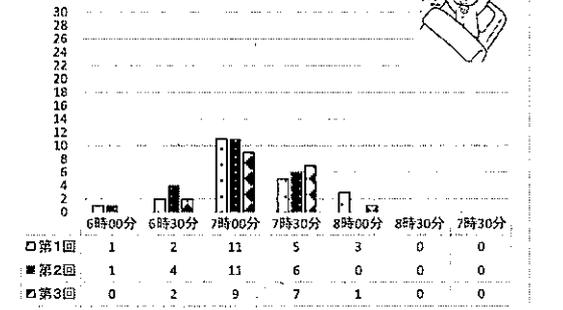
はみがきをする



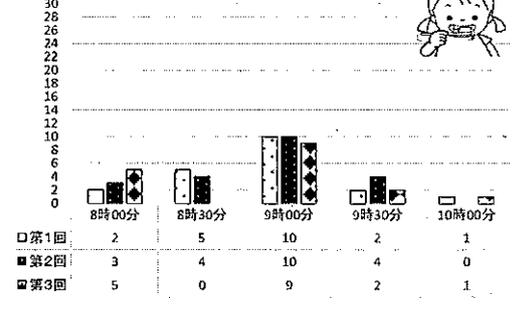
きめたじかんにねる



きめたじかんにおきる



きめたじかんにねる



【研究テーマ】

自己肯定感と生活習慣と接続期の課題

【実践の仮説】

※育みたい子どもの姿

本園は、豊地・中郷・宇気郷の3地区を有し、自然豊かな環境にある。また、核家族が増えつつあるものの、同居や敷地内の同居が半数近くを占め、二世帯、三世帯の中で愛情深く育てている子どもが多い。

しかし、自分の思いを表現することが苦手な子どもが多く、人前では恥ずかしがって話せない姿もある。また、大きな声で挨拶や返事ができない、鼻がかめない、服が脱げないなど、基本的な生活習慣の確立にも課題がある。

そこで、自己肯定感を高めることによって、何事にも挑戦していく強い心を育てたいと考える。

研究の視点

- (1) 幼児の良いところ、成長が感じられるところをみつけてほめる。そして、広げる。
- (2) 友だちの頑張りを幼児同士が認め合う場を設定する。
- (3) 基本的な生活習慣を身につけさせ、自信をもたせる。
- (4) 小さな成功体験を積み重ね、苦手意識をもたせない指導の在り方を考え合う。
- (5) 活動と活動の間を大切にみつかる。

【子どもの様子】(6月)

(1) すみれ組(3歳児)

入園して2か月が過ぎ、持ち物の始末を自分でしようとしたり、友だちに「おはよう」と挨拶をしたり、好きな遊びを見つけて教師や友だちとかかわって遊ぶなど園生活に慣れてきた様子がみられるようになってきた。しかし、まだ玩具の独り占めをしたり、思い通りにならないと大声を出したり、自分の思いを言えずに手が出てしまったりすることもよくあった。一人一人の幼児の言葉に答え、思いを丁寧に聞きながら、言葉や関わり方を知らせていきたい。

Aは、気持ちが不安定で、なかなか保育室に入りにくい日があったり、登園すると「あー」と大きな声を出して、遊び出しにくい日があったりした。また、「もっと遊びたかった」「集まって座るのがいやだった」「自分が使いたいおもちゃが使えなかった」など、自分の思いと違うことがあると、唾を吐いたり、教師の手に爪を立ててぐっぐつつかんで怒ったりする姿が見られた。特に給食前になると、気持ちが不安定になり奇声をあげたり、「食べない」と言って部屋から出て行ったりする姿があった。保護者との話によると、好き嫌いが多くことから家では祖父が食事面で厳しく接するので、楽しんで食事をする事ができていないことがわかった。

(2) さくら組(4歳児)

進級当初は、朝の持ち物の始末や降園準備、衣服の着脱、遊んだ玩具の片付けなど集中して取り組めなかったが、4月になり少しずつ改善がみられるようになってきた。しかし、まだまだ教師と1対1の関わりを求めてくる幼児が多く、一斉活動をするときには指示がなかなか通らない

ことが多い。争いごととも頻繁に起こり、言葉で自分の思いを表現できず、気持ちが高揚するとすぐに噛んだりひっかいたり、手が出てしまう幼児も数人いる。給食では、食欲のある幼児もいるが、偏食や少食が目立つ幼児も多い。また、行儀よく食べられない幼児も数名いる。

Bは、自分の事は自分でするように厳しくしつけられている子どもである。家庭には子育てに対するポリシーがあるため、朝は父親の出勤に合わせて午前4時10分に起床し、テレビは見ない、おやつは食べない、空手とスイミングを習うという生活を送っている。園では自分の思い通りに物事をすすめようとして、強い口調で相手を批判したり、手を出したりする姿が頻繁にみられ、教師が話をしても自分のしたことを素直に認めようとしなかったりする。一方で、教師や母親が「上手にできたね。」と褒めたことに対して「上手じゃない、下手くそー」と言ったり、「Bのこと大好き」と言っても「叱られてばかりでいい子じゃない」「私なんか・・・」と言ったりすることもよくある。

(3) うめ組(5歳児)

全体的におとなしく、強い口調で言い争う姿はほとんどみられない。2・3人の気に入った友だちとのかかわりを好み、自分たちの世界を大切にしたいという思いから、後から遊びに加わりたいという友だちを受け入れにくかったり、集団での遊びに発展しにくかったりする姿がある。戸外遊びでは、ひとつの遊びを継続して楽しむことが少なく、ルールのある遊びを始めても途中で抜けていく幼児が多いため、十分におもしろさを味わうことが難しい。また、自信のないことや初めての遊びには、「できない」「やりたくない」と言って参加しにくい幼児の姿もある。

Cは自信のなさから何事にも消極的で、自分の思いを人に伝える姿をみることは少ない。また、行動がゆっくりで、自分の身の回りのことやクラスの活動の1つ1つにおいて時間がかかる。製作活動については根気よく取り組むが、何日もかけて少しずつやり遂げていくので、友だちとのかかわりや遊びが深まりにくい。給食では偏食が多く食べられる量もわずかである。少しでも多く食べてほしい、いろいろな食べ物の味に慣れてほしいという教師の思いから、他児よりも時間を多く要し、その後の活動(片付け・牛乳パックを洗う・歯磨きなど)もまた遅れてしまうことであそびに参加しにくいという悪循環を繰り返してしまっている。盛り付けの量を極端に減らしたり、教師が傍らに寄り添って励ましたりしているが、なかなか改善しにくい姿がある。歩き方、走り方などどことなく不安定で気になる。当番活動では、Cが遅れることで全体に影響を及ぼすことも少なからずある。

【実践のねらいと内容】

○研究主題「自己肯定感を高め、何でも進んでする子をそだてる」にせまるために

(1) すみれ組(3歳児)

- ・ 幼児との信頼関係を築いていけるよう、温かく幼児の気持ち受けとめていくようにする。
- ・ 園での食事、排泄、衣服の着脱など、基本的な生活の仕方を知らせていく中で、幼児が自分でできたところを認め自信につなげる。
- ・ 幼児が考えたこと表現したことを認めていき、自信につなげる。
- ・ 友だちへの関心が広がるように、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを保育者が仲立ちとなって知らせる。

- ・片付けの時間を大切に扱い、片付けやすい環境設定をしたり、楽しみながら片付けられるように言葉がけを工夫したりする。
- ・日々の保育の中で、「自分は大切にされている」「自分は認められている」と感じる経験をたくさんできるようにする。

《A児に対して》

- ・Aの気持ちを汲み取り言葉に表したり、友だちとの関わりかたを丁寧に知らせたりする。
- ・周りの友だちにはAとの関わりを怖がることのないよう、Aの気持ちを伝える場面をつくっていくとともにAの良いところを伝えるようにする。

(2) さくら組(4歳児)

- ・降園活動で幼児の挑戦しようとするいい姿を紹介し友だちに知らせることで、幼児の自信につながったり、まだできない幼児も「やってみよう」という気持ちをもったりできるようにする。
- ・普段から友だちにしてもらって嬉しかったことや友だちの良いところ、「好き」という気持ちを積極的に相手に伝えていくように声かけする。
- ・話を聞けるように、聞く時の姿勢や目はどこを見るか等、具体的に気を付けてほしいことを伝えるようにする。
- ・幼児が自分の思いを言葉で伝えられるように保育者が仲立ちをして、それぞれの思いに気付けるように関わる。
- ・幼児のがんばっていることや素敵だと思うところを周りの幼児にも伝え、お互いに認め合える友だち関係を築けるようにする。

《B児に対して》

- ・友だちにやさしく接したり素直に行動したりしたときには「ありがとう えらいね」と褒めた後「そんなBちゃん大好き」と言って本児への思いを伝える。
- ・9月から担任が変わったこともあつてか、担任へのつねる・たたくなどの試し行動が毎日みられた。最初は「やめて」と言いながらも、Bとの関係を作るために受け入れるようにして少し様子を見ていた。しかし、善悪の判断も身につけてほしいと思うので、「私は痛いからやめてほしい」「Bにされたいやだからしてほしくない」と具体的な気持ちを伝えながらやめるように促す。
- ・Bが描いたり作ったりしたものを「先生見て」と声をかけてきた時に、「上手」という言葉で認めるのではなく、「この色がきれいやね」「この模様が細かく描けていて素敵」とBの製作物でしか認められない言葉で声をかけるようにする。
- ・母親とBについて話し合う機会を持ったり、連絡帳で様子を知らせたりして保護者とともにBの成長を支援していきたい。

(3) うめ組(5歳児)

- ・幼児の遊びや興味に共感したり一緒に加わったりすることで、何に楽しみを感じているのかを知り、必要な材料を準備したり遊びやすい環境を設定しておいたりする。
- ・幼児の発想をともに喜んだり認めたりすることで自由に発言できる雰囲気づくりをしながら、時には一緒に考えるなど幼児の気持ちに寄り添った保育をするよう心がける。
- ・幼児の「やりたい気持ち」を大切にし応えていくことで、意欲や自ら進んでしようとする気持ちを育てる。

- ・ 幼児が何をしようとしているのか、何を必要としているか、先取りするのではなく、試行錯誤する過程を大切に作る。
- ・ 友だちと衝突したり失敗を重ねたりしながら、次どうしたらよいか幼児自身が考える機会をつくる。

《C児に対して》

- ・ Cが友だちと一緒に活動を始められるように、早めに繰り返し声かけをする。
- ・ Cが少しでも早くできた時にはたくさん褒めたり、教師の嬉しい気持ちを伝えたりする。

○実践の具体例

3歳児(男児6人・女児2人 計8人)すみれ組

11月22日(木)13:00~13:10

(自分で描いた絵をみんなに見せたいという姿から)

給食後、自分の好きな遊びを始めるときに、A「先生、電車描く！」と言い、絵を描く机を指さした。以前、机いっぱい大きな紙に電車を描くことを喜んでいたので、「分かった、大きな紙に描く？」と尋ねると、笑顔で「うん。」と頷いた。紙を用意し、「できたよ。」というと、頷き、クレパスを持ってきて、青いクレパスで紙の一番上に大きく、細長く電車を描くと、その下にもその下にも次々と電車を描いた。①教師が「Aくん電車、いっぱい描いたね。」と声を掛けると、A「これははやぶさ、これはひかり、これは700系」と順番に指をさして教師に話した。教師「いろいろな電車が描けたね。」と言うと、Aは思いついたように「こまち描く！」とクレヨンに赤を替え、描き始めた。こまちを描くと紙がいっぱいになり描くところがなくなった。Aは嬉しそうに紙を両手で持ち、絵本コーナーにいたBのところに行って行った。Bは絵本を見ていてAの方を見るそぶりがなかったので、②教師が「Kちゃん、Aくん電車描いたんやって」と声を掛けると、Kは絵を見て笑顔になり、K「すごーい！」と言うと、Aは満足そうな表情をした。③Aは絵を持ったまま、「あっち」と入り口の方を指さした。教師「見てもらいたいの？」と聞くと、頷き、年中組の方へ歩き始めた。紙を両手で広げて持ったまま年中組の部屋に入り、見て欲しそうにするAであったが、年中組が気づく様子がなかったので、教師と一緒に年中組さんのもう少し傍へ行くと、気づいたSが、「すごーい！電車や！」と、Aの絵を見て言った。④Aはまた嬉しそうな表情になり、「あっち」と次は年長組を指さし、はにかんだ笑顔を見せた。教師と一緒に年長組の方へ行くと、気づいたDが、「電車、描いたんや！」と言い、Aの絵を見て声を掛けた。Aは満足そうにクラスの方へと足を向け、歩き始めたが、クラスの前を通り過ぎ、職員室にいた先生方に見てもらい、嬉しそうにしていた。

〈考察〉

- ① Aがのびのびと絵を描く姿を見て、声を掛けた。嬉しそうに保育者に話す姿から、Aが絵を描くことを楽しんでいる姿が伺えた。以前は大きな紙に絵を描く姿は見られず、自分から絵を描くこともあまりなかったため、絵に興味が出てきたとともに、安心して表現できる場になっているのではないかと思った。

- ② Aの様子から、Kに見て欲しいのだろうと考え、Kに声を掛けた。Kが自分の絵を見て笑顔で喜んでくれたことがAにとってとても嬉しく、褒めてもらえたように感じたのではないかと思う。
- ③ Aは自分の作ったものを見てもらいたいときに、職員室へ行くことはあったが、年中組へ行くことは初めてであった。Aの中で満足して描けた絵であり、Kにも褒めてもらったことが他のクラスの友だちにも見てもらいたいという気持ちにつながったのではないかと思う。
- ④ それぞれのクラスの友だち、園長先生や担任外の保育者に絵を見てもらい、認めてもらったことは、本児の遊ぶ意欲や自己肯定感につながると感じた。

※Aが家に絵を持ち帰った次の日、Aの母親が、「父と祖父が驚いていました」と話し、Aが家でも認めてもらったことが伺えた。Aは次の日も「大きな紙に描く」と言い、絵を描いた。Aが園でも家でも認められる経験となったように思う。Aが安心して意欲的に遊べる環境を大切にしていきたい。

4歳児（男児8人 女児4人 計12人）

11月22日（金）9：40～9：50

～絵を描いている時の教師や友だちとのかかわりの中から～

BとTは自分の作りたい物や描きたい物を楽しみながら、一緒に遊んでいた。Bが「私女の子の絵描こっかな」と言うと、Tが相槌をうつように「うん」と言った。①普段からBが描いている時に教師が見ると「も～う、見やんといて！！」と笑いながら怒ってくるので、「どんな絵をかくのかな」と思いながらBに気づかれないように遠くから様子を見ていた。Bが顔を描いて髪の毛を描き始めた時に、「あ～あ、やっぱり私って下手くそにしか描けやんなあ・・・」とつぶやいた。②教師は声をかけようか悩んだが、「Bちゃんが描いてる女の子、楽しそうな顔で素敵やね」と気持ちを伝えた。すると、「そんなことないよ。先生の方が上手に描けるよ！」と少し強めの声で言った。「私、Bちゃんの絵、好きだよ。いっぱい色使ったり、楽しそうな物たくさん描いてるやん」「ううん、先生の方が上手！」「そうかな・・・」「私下手くそやもん」とBと教師がやりとりをしていると、③隣で製作をしていたTが「Bちゃんのこの女の子の髪の毛、くるっとしてとってもかわいいな」とBに言った。Bはちょっとはにかんだ表情になり「そう?!」と答えると、Tは「うん、かわいいよ。なあ、先生?」と尋ねてきたので、「うん、私もそう思うよ」と答えた。Bはうれしそうな表情で、「ありがとう」と言って絵の続きを描き始めた。

<考察>

- ①本当は教師に見てもらいたいのが、素直にその気持ちを伝えられずに「見やんといて」と反対の気持ちを言うてくることがある。教師は言葉だけでなく、表情や仕草などからも幼児の気持ちを理解し、関わっていく必要があると考える。
- ②2学期にBの母親と園や家での様子を出し合いながら、どんな時にBが自分で描いたり作ったりした物に対して否定的な言葉を使うかを考える機会を設けた。すると、完成していない途中の段階で声をかけるとそのような言葉を使うことが多いかもしれないということに気づいた。以後は園でも家でも、タイミングを考えて具体的な言葉で絵を見た思いを伝えていくようにしていた。でもこの日は絵が途中の段階でBがつぶやいたので、教師へのかかわりを求めているのではないかと感じ声をかけた。

③BにとってTは憧れの存在のようで、家で“Tちゃんみたいになりたい・Tちゃんみたいに絵がかわいく描けるようになりたい”と話しているようである。それほど大好きなTから自分の描いた絵をほめてもらうような声をかけてもらったことは、Bにとって喜びであり自信にもつながったのではないだろうか。教師や友だち・たくさんの人から自分のことを認めたり受けとめてもらったりする経験をすることで、B自身をもっと自分のことを好きに思えるようになってほしい。

5歳児（3年保育 男児6人 女児12人 計18人）

＜幼児の姿＞

豊地文化祭が終わり、展示していた親子製作の指人形を使って遊ぶ姿がみられた。登園し朝の準備を終えるとすぐに指人形をつけて、後から来る友だちや保護者に「おはよう。」と声をかけて出迎えていた。また、友だちと一緒に他のクラスや職員室の先生のところに行って、人形の役になって話しかけたり、「乱舞彩祭かけて。」と言って、遊戯室で運動会やステージ発表で楽しんだ踊りを踊ったりする姿が見られた。

「なあ、先生劇したい。みんなで役になって、すみれさんやさくらさんに観てもらいたい。」個々で遊ぶことに満足したのか、今度は自分たちが演じ、他の先生や年下の友だちに“観てもらいたい”という気持ちを表すようになった。

11月16日（金）（11：10～11：40）

＜友だちや教師と一緒に、親子製作で作った指人形を使った劇遊びについて考える姿から＞

「みんな、おうちの人と一緒に作った指人形でいっぱい遊んで楽しそうやね。ねこやうさぎやいろんな動物がおるから、すみれさんやさくらさんにも見せてあげると嬉しそうやね。」と教師が話し始めると、「うん、Eももっといっぱいみてほしいから、みんなで劇したい。」F「うん、Fも。すみれさんやさくらさんや先生もいっぱい呼んでさあ。」と、EやFが言うと、他の幼児たちも①「うん、やりたい。やりたい。」と目を輝かせて賛成した。教師も「それはいいなあ。」と答え、「じゃあ、どんなお話しにする？」と問いかけた。G「G、みんな出て来る話がいい。動物たちと恐竜の話。」「えっ?! 動物だけと違うよ。」モアナという名前の女の子を作った幼児が言った。G「ああ、そうやな。チューリップはどうしよ。」E「最初はチューリップがまんなかで揺れとるの。そしてみんなは、下に隠れとってチューリップの歌を歌う。それから音楽の音で出て来る。②先生、音楽かけて。」教師「わかった。曲探してくるわ。」G「それで、歌いながらどんどん動物が出てきたらどう？」③F「ああ、それいいなあ。」そうして、みんなでそれぞれが出て来る順番を決めていった。④H「だんだん手を繋いで友だちになっていこに。」E「うん、そして恐竜が一番最後に出て来る。その前に、なんか言おう。」④H「楽しいね。」E「歌うと心があつたかくなるね。」次々と湧き出て来る幼児のイメージに教師も共感し、「なんか本当に楽しくなってきたね。」と、嬉しい気持ちを伝えた。さらにイメージは広がり、E「恐竜は襲う。みんなは、キャーと言って逃げる。」H「みんなは草に隠れる。しゃちは水の中に飛び込む。ねこは急いで森に逃げて迷子になってしまうん。」と、続けた。おさるのジョージを作ったJが、「恐竜が襲っているところにジョージが出て来る。」と言って、Gと二人で戦う場面を演じ始めた。J「ねこたちを襲っているのはおまえか！」G「そうだ！」J「おまえの口に入れてやる！」G「そんなのきかないぞ！」二人の様子を見ていた幼児たちが、続きの展開を考え始めた。E「恐竜が死んでしまう。」

④H「仲間になるって感じの方がいいやん。」L「気絶して『もうやめてくれ。』って言って、友だちになる。」G「『もう許してくれ。』って言う？」L「『ごめんなさい。』って言って、みんなで『もういじわるはしないでね。』って言う。」④N「最後はみんなで踊る。」E「おうちを作って、みんなで歌いながら帰る。」M「何の歌にする？」E「クリスマスの歌にしたらいいやん。②クリスマスの歌は先生がかける。手を繋いで、振っておうちに帰ったら？」M「それ、どんな順番なん？」⑤E「じゃあ、順番決めよ。来た順番でええよ。」L「仲良くなったから、パーティしよ。」⑥C「ケーキに『仲良くなったよ。また、明日遊ぼうね。』ってかく。」

⑦E「じゃあ、やってみよう。」⑧H「ぐちゃぐちゃに並んどるから、まず順番に並ばな。」E「先生、台詞とか、覚えるように②紙に書いてここに貼っというて。みんな見るように。」

<考察>

- ①他のみんなもEやFと同じように考え、気持ちをひとつにしてクラスが盛り上がり行く様子を捉え、教師も同じ気持ちであることを伝えたいと思った。
- ②幼児が教師も演じる側の一員として捉え、役割を分担していく様子を頼もしく感じ、教師もそれに応えるようにした。それは、幼児の自己肯定感や物事を自発的に進めていく力に繋がると考えた。
- ③友だちの意見を聞いて、共感したり、認めたりする言葉を発することが出来るFの存在は、その場の空気を盛り上げたり、意欲的に活動を続けていったりするために大切であると感じた。
- ④これらの自然に出てきた幼児の言葉は、普段から友だちのことを大切に思い、友だちと一緒にいることが”楽しい”と感じているからではないかと推測する。
- ⑤Eのペースで何事も決まっていくことが多く、またMもEに決めてもらうのを待つような様子がみられることがあるので、気になっている。
- ⑥日頃は、みんなの意見ややりとりを黙って聞いていることが多いCも自分の思いついたことを自然な流れで発言していた。友だちの意見を聞きながら自分もお話をイメージし、Cの優しい気持ちのこもったメッセージを残そうとしたことが嬉しく感じられた。
- ⑦Eのこの言葉がなかったら、お話のイメージを互いに伝え合うだけで終わってしまったかもしれないし、教師が主体となる言葉を発してしまったかもしれない。幼児自らが主体的に活動を進めていくにあたり、やはりEの存在は大きいと考える。
- ⑧進級当初、どこか自信がなく遠慮がちに話す様子がみられたHであったが、活動をスムーズに進めていくために必要なことを見通しをもって考え、周りの友だちに伝えていく力が育ってきていると感じ、嬉しく思った。

*みんなで一度やってみようということになったが、Eはまた思いついたように、「これじゃ、足りるかなあ。短くない？」と話の内容を気にする様子を見せていた。これまで、Eのひらめきと行動力で、クラスとしての遊びや活動をリードしていく場面が多くみられた。その反面、ドッジボールやルールのある遊びなど、勝敗が決まる場面で負けてしまうと、気持ちを立て直しにくく遊びから抜けてしまう姿があった。Eにとっては、成功体験ばかりではなく、失敗したり、思うようにいかなかったりする経験も重ねながら、自分の気持ちに折り合いをつけたり、再度挑戦しようとしたりする力を育てていくことも必要であると考えた。

【活動への環境の構成】

○わくわくデーでの鉄棒

毎週1回、異年齢でふれあい遊びをしたりダンスを踊ったりする「わくわくデー」を実施している。そのとき、鉄棒を使って全園児の前で自分のできる技を一人ずつ披露する機会を数回持った。みんなに拍手してもらったりほめてもらったりしたことで意欲が増し、主体的に鉄棒遊びをする子どもが増えた。その結果、年長組ではほとんどの幼児が逆上がりを出来るようになり達成感を味わった。



○製作活動 必要な素材や用具が容易に使えるように



大型積み木を使って海賊船を創っていたとき、ハンドルをつけようということになった。動くハンドルをつけたいと工夫をこらし、割り箸とペットボトルのキャップを使って動くハンドルをつけることに成功した。

また、お散歩できる猫を創ろうと工夫している場面があった。ストローで足を作ったがうまく動かない。次にストローの先にペットボトルのキャップをつけて少し動きやすくなった。もっとスムーズに動かすために長方形の画用紙をつけてすべらせた。いろいろな素材が手の届くところにあるので、子どもたちは創意工夫をし達成感を味わうことができた。



○異年齢交流

年長児にとって、異年齢交流は自己肯定感を高めるいい機会になる。年中児や年少児にみてほしい、みてもらってうれしい、喜んでもらうためにこうしようという気持ちから、「お店屋さん」「ペープサート」「人形劇」など様々なことをやりとげた。

【支援・声掛けのポイント、工夫】

- ・名前を大事にあつかう。

子どもを褒めたり、お礼を言ったりする場面で「〇〇さん、ありがとう」「〇〇さん、友だちにやさしくできたね」など子どもの名前を言うようにした。

- ・感情を教師が共有する。

「ほめられたい」「愛されたい」と思っている子どもには、教師がうれしいことや悲しいことなどの感情を共有し、ホッとできる居場所・人・時ができるようにした。

- ・「ほめる」「肯定的に受け止める」は大切だが、それだけではいけないことを職員間で共通理解する。

絵を「上手に描けたね」とほめるのではなく、「わあ、おもしろいね」と一緒におもしろがったり、「ここの色がすばらしい」など具体的にほめたりするようにした。

- ・友だちから称賛される場を設定する。

教師にほめられるより、友だちに認められたとき子どもはとても満足そうな表情をする。遊びの中で友だちの良さに気付くような声掛けをこころがけた。

【子どもの様子】1月

(1) すみれ組（3歳児）

子どもたちは一人一人が好きな遊びを楽しむ姿から、友だちとやりとりをして楽しむ姿へと変化が見られるようになってきた。ままごとや砂場で、自分が作ることを楽しみながらも教師や友だちに見てほしいという姿が多く見られるようになり、教師や友だちと過ごすことの嬉しさを感じている様子がある。また、言葉で自分の思いを少しずつ伝えられるようになってきて、やりとりができるようになってきているが、自分がこうしたいという思いが強い時には、友だちが自分の思うようにしてくれないと怒るという姿もある。自分にも気持ちがあるように相手にも気持ちがあるということを知ったり考えたりできるように、また友だちとの関わり方を身に着けていくように根気強く保育をしている。

Aは、9月運動会へ向けての活動で『踊り』は、自分が覚えられていないことが負担となり、「踊らない」と言ったり奇声をあげたりしていた。しかし11月の文化祭では家族がAの踊りを見てその姿を褒めてもらうという経験をした。そのころから、怒ったり奇声を挙げたりすることが少なくなった。本児にとって家族に褒めてもらったということが気持ちの安定につながったと感じる。また、教師がAと一緒にたくさん遊び、Aが気持ちをうまく表現できないときに気持ちを汲み取り「こういう気持ちやったの?」「こうやってしてみたら?」と遊び方や関わり方を知らせるようにしてきた。また、本児が危険なことをしたときには危ないことを伝えるとともに本児を大切に思っていることを繰り返し伝えていく中で、教師とAとの間に信頼関係ができてきた。

食事の面では、2学期後半から、食べる量や食べられる食材が増え、食べるペースが速くなった。以前は「朝ごはん残して『ごめんなさい』した」と話し、給食前には暴力的になったり、教室から出て行ったりする姿があったが、このころから家で叱られることが少なくなったのか給食前に気持ちが不安定になることがなくなった。

園や家で自分の事を認めてもらったり、褒めてもらったりすること、園でありのままの自分をだしてもいいんだという安心感が、Aの気持ちの安定、自己肯定感につながっていると感じる。



(2) さくら組（4歳児）

友だちと一緒に遊びたいという思いから、「今日は〇〇しよう」「一緒にあそぼ」と誘い合ったり、「こんなん作ったよ、見て」と関わっていったりする姿が見られるようになってきた。また、じっくりとひとつの遊びを楽しんだり、自分のイメージしたものをのびのびと表現したりする姿も



見られるようになってきた。ルールのある遊びは教師も一緒に遊びながら、みんなで一緒に一つの遊びをする楽しさを味わえるようにすることで、自分から遊びに入ってくるようになってきた。

自分の思いをなかなか言葉で伝えることができずいたり、嘸んだりする子もいたが、教師がそれぞれの思いを丁寧に受

け止め関わってきたことで、自分の思いを言葉で相手に伝えられるようになってきた。さらに、友だちが困っていると「どうしたん？」と声をかける姿も見られるようになり、表情やしぐさから相手の思いにも気付けるようになってきた。

Bは友だちや周りの様子をよく見ている、「これはこうやってするの」「私と一緒にしてあげよか」と声をかけたりやさしく関わったりする姿がみられた。時には口調が強くなってしまいうこともあるが、その都度「いいこと気付いてくれたから、もうちょっとやさしく言ってあげてね」とBの気持ちを受けとめながら、相手への伝え方に気を付けるようにかかわってきた。Bは2学期の中頃から「先生、ぬり絵しよ」とよく声をかけてきた。Bが描いた絵を二人で塗っていると、「先生、ここの模様かわいいやろ」「私こんなに細かい模様も描けるんやに」と自分の描いた絵をうれしそうに話してくれることもあった。園や家庭で認めてもらったり、受けとめてもらったりする経験の積み重ねで、Bの自信となり自己肯定感が育まれてきてると感じる。

(3) うめ組(5歳児)



幼稚園でのリーダー的存在として役割を担うことでそれが自信となったり、意図的に集団での遊びを経験する機会をつくることにより、次第に集団での遊びの面白さがわかってきたりした。そのことにより、積極的に遊びに参加し、遊びを自分たちで進めていく姿を見せるようになった。さらに、友だちと考えを出し合い工夫したりして遊びに没頭する様子が見られるようになった。友だちの提案に応じ、そのための準備を一緒に進めたり、意見を言い合ったりする中で自分

の思いを伝えたり、異年齢の友だちや教師、お家の人などに自分たちのしていることを見てもらいたいと思い、はりきって活動に参加したりしていく姿がみられるようになっていった。

また、苦手なことにも挑戦し、出来るようになりたいという思いから、根気よく継続的に取り組む姿もみられるようになった。あきらめてしまいそうなきには教師も一緒に取り組んだり、励ましたり、言葉をかけながら支援するようになっている。

Cのことについて、教師の言葉がけや、教師の嬉しい気持ちを伝える表情などを間近で見えてきた幼児たちもまた同じように、Cが早めに行動できたとき、少しでも多く給食を食べることができたときなどに、「Cちゃんはやくできたね」「全部食べてすごいね」と認めたり励ましたり、「そんながんばったCちゃんの姿がうれしかった」と思いを伝えたりするようになった。Cも嬉しそうに笑いながら「C頑張る」と自ら意欲を見せるようになっていった。

Cは「根気よく取り組む」という良いところがある。以前から黙々と鉄棒に取り組んでいたCが、ついに逆上がりが出来ようになった。まだまだ逆上がりが出来ない幼児が少なかったため、クラスの友だちから「Cちゃんすごい！」と認める言葉を多くかけられた。

教師から認められることもCの自信につながったと思われるが、Cにとって友だちに認められたことが大きく作用して、何事にも積極的になったり、みんなの前で意見が言えるようになったりしたと考える。また、食事や着替え等の基本的な生活習慣が身につけてきたこともCの自信につながっている。

【生活習慣の向上に向けた取組とその成果】

生活習慣チェックシート達成率

項目	歳児	%
○時に起きる	3歳児	84
	4歳児	78
	5歳児	82
朝ごはんを食べる	3歳児	98
	4歳児	99
	5歳児	98
うんちをする	3歳児	80
	4歳児	92
	5歳児	79
(すすんで) あいさつをする	3歳児	94
	4歳児	94
	5歳児	96
からだを動かして遊ぶ	3歳児	100
	4歳児	87
	5歳児	92
お家のひとと一緒に本を読む	3歳児	88
	4歳児	82
	5歳児	69
(歯磨きをしてから) ○時に寝る	3歳児	80
	4歳児	81
	5歳児	88
自分で着替えをする	4歳児	97
	5歳児	98
テレビ・ゲームの時間	4歳児	84
	5歳児	73

三重県教育委員会の生活習慣チェックシートを活用した。

2学期の始業式では、第1回の生活習慣チェックシートの結果を子どもたちに知らせ、夏休みで少し崩れていた「早寝早起き」や「元気な挨拶」などを頑張ることを子どもたちと確認し合った。

第1回～第3回の生活習慣チェックシートの達成率にはあまり差異はみられなかった。本園の子どもたちは、同居や敷地内同居が半数近くを占め、愛情深く育てられていることが伺える。

年長児になるとチェックシートがあることによって、主体的に頑張ろうとする姿があり、効果的だと感じた。

2学期末の保護者会で、「生活習慣チェックシート達成率」を示し、「お家のひとと一緒に本を読む」の達成率が5歳児で減ってきていることから、読書の大切さや幼児期に語彙数を増やすことが学力向上につながることを伝えた。

また、自分で決めた時間を守る習慣を幼児期につけておくことの大切さ、特にテレビ・ゲームの時間を守る子どもに育てておくことは小学校以降の学力向上につながり、大切であることを話した。

【小学校との連携方法】

(1) 幼小連携（豊地幼稚園・豊地小学校）

・6月 園内研修「楽しい音楽活動を目指して」

豊地小学校から1年生の担任と音楽専科の先生を園内研修にまねき、小学校での「楽器の使い方と指導方法」「歌の指導方法」について学んだ。音楽の教科書も見せてもらい、楽器あそびをするときの楽器の持ち方や音の鳴らし方などこれからの保育にとっても参考になった。

そのとき、2、3年生でやっているというリズム打ち「わっしょい！すしまつり！」を教えてくださいました。

・ 7月 夕涼み会にて、研修で教えていただいた「わっしょい！すしまつり！」を全職員で演じ、園児や保護者に披露した。その後、年長児が「わっしょい！すしまつり！」をやりたいたいと言出し、年長児のクラスで「わっしょい！すしまつり！」のリズム打ちが始まった。

・ 9月 幼小合同避難訓練

・ 11月 嬉野一斉公開日の豊地小学校全校音楽交流会に参加

豊地小学校の体育館で1、2年生の合唱や合奏を聞かせてもらった。また、自分たちも今まで遊んできた「わっしょい！すしまつり！」のリズム打ちを小学校全校生と保護者の前で演奏した。大勢の人前で発表するという経験や、小学生の音楽活動を目の当たりにして音楽遊びへの意欲が増したようだった。翌日、2年生がピアノで演奏していた「たぬきさんねらいうち」の曲をオルガンで弾く子どももでてきた。そこで、2月に行われる生活発表会につなげていこうと考えた。

・ 12月 5年生との音楽交流

11月の全校音楽交流会では、低学年の音楽活動に参加しただけだったので、3年生以上の合奏を聞くことができなかった。木琴や鉄琴、いろいろな打楽器などを使った合奏は、年長の子どもたちにとって、音楽遊びへの刺激になると考え、5年生との音楽交流をさせてもらった。まず、5年生の合奏を聞かせてもらいそのあと、いろいろな楽器をさわらせ



てもらい、音の出し方などを5年生のお兄さんお姉さんに教えてもらった。

翌日、保育室に木琴や小太鼓、大太鼓を出しておくのと、登園してきた子どもたちが興味を持ち、次々に音楽遊びに加わる姿があった。小学生との交流が良い刺激となり子どもたちのやる気につながった。

・ 1月 6年生との体育交流

年長児は12月から縄跳びをしはじめた。そこで、6年生との体育交流で6年生の人たちの短縄跳びの技を見せてもらい、そのあとマンツーマンで、一緒に跳んでもらったり、跳び方を教えてもらったりした。園に帰ってきてから縄跳びをしたいという子どもが多く、駆け足跳びやあや跳びなどに喜んで挑戦していた。ここでも小学生との交流が遊びの質を高め、難しい縄跳びに主体的に挑戦する子どもが増えていった。



・ 3月 1年生の授業見学及び参加

実際の1年生の授業を見学するとともに、一緒に授業に参加させていただく予定。

(2) 保幼小交流（嬉野保育園・豊地幼稚園・豊地小学校）

- ・ 6月20日（10:00～11:00） 嬉野保育園にて ゲームふれあい遊び
- ・ 10月9日（10:00～11:00） 嬉野保育園にて ミニ運動会
- ・ 11月13日（10:00～11:00） 豊地小学校にて 人権に関する人形劇
- ・ 1月24日（9:30～10:30） 豊地小学校にて お店屋さんごっこ

【学識経験者より】

テーマに沿って研究の視点が具体的に示されており、教職員が共通認識をもって日々実践を行うことができる。このテーマを決定し、研究の視点を決める過程での教職員の話し合いが、まずは幼児教育を推進していく上で大切な第一歩と考える。それぞれの教職員が、自分の思いや考えを安心して表出できる人間関係であり、教職員同士が他者を受け止め、認め合う姿が子どもたちに自己肯定感を育てるモデルとして大きく影響すると考えられる。公開保育後の話し合いに参加させていただいて、ファシリテーター役の教師のもと、子どもの姿（行為）に、どのような意味があるか、子どもの立場に立ち、家庭背景を含め教職員が話し合うことで、子どもの見方に広がりができ、意思疎通ができ、子どもの内面理解が深まる。

自己肯定感を高めていくには、幼少期に一人一人が愛され、理解され、認められる体験が大切である。子どものつぶやきに耳を傾け、思いを言葉にして、時には代弁し、子どもが安心して自己表出できること。そしてその思いを温かく受け止め共感する。子どもは自分の思いが「分かってもらえた・認めてもらえた」と感じるようになり、その教師との関係に愛着と信頼が成り立つ。信頼関係が形成されて、はじめて教師の願いを届けることができる。この体験を丁寧に重ねていく中で、子どもは、他者との関係性（人への関わり）を築いていく。良いところを見つけ、具体的に褒めてもらう。「ありがとう」を言ってもらうことなどで、「人の役に立っている・自分の存在を認めてもらっている」と、自分に自信が持てるようになる。自分に自信が持てると、様々なものに挑戦し意欲的に取り組む姿勢に繋がり、教育活動の「学びの芽生えから自覚的な学び」への移行が円滑に行えると考えられる。

5歳児うめ組の1月の実践では、友だちの中で自分の考えや思いを出し合い試行錯誤をしながら、主体的な活動を導く環境構成や教師の適切な援助があって、意欲的に集団で遊び込む面白さが分かり、楽しむ姿まで頼もしく成長していった。クラスで共通した目標に向かって、自分の役割を理解し、集団の一員としての自覚が育ってきていると感じられる。まさに遊びを通した総合的な指導により「生きる力の基礎」となる心情、意欲、態度が養われてきている。

また、生活習慣もチェックシートをつけることで、誰にでもよく分かり効果的であるが、一方で「出来る」「出来ない」の評価につながりかねない。そうではなく、出来ることが増えていく（成長）喜びを伝えていくことが、自信や意欲に繋がる。また、基本的な生活習慣が身に付くことは生涯における人格形成の基礎を培う土台として重要である。

豊地幼稚園では幼稚園と小学校が隣という立地条件を上手く活用し、普段から双方が垣根を超えた顔の見える様々な交流を行い、幼小の教育の連続性・一貫性のよりよい効果を発揮することができたと考えられる。幼稚園児にとっては、身近な憧れの存在として、自分たちもやってみようという意欲に繋がり、主体的な活動を育んでいる。また、小学生には、教える体験が自信に繋がり自己肯定

感を高めることができる。「生涯にわたって自ら学ぶ態度を培う」教育の目標にむかって、双方の成長を促す良い連携の機会になっている。

今回、実践研究園の豊地幼稚園の公開保育を見学させていただき、教職員が共通目的のもと、熱心に研究される場に参加させていただいて、改めて共に学ぶ場の機会をいただいたことに、感謝したい。